福岡市埋蔵文化財調査報告書第830集

弥永原遺跡 5

－第６次調査報告－

２００４

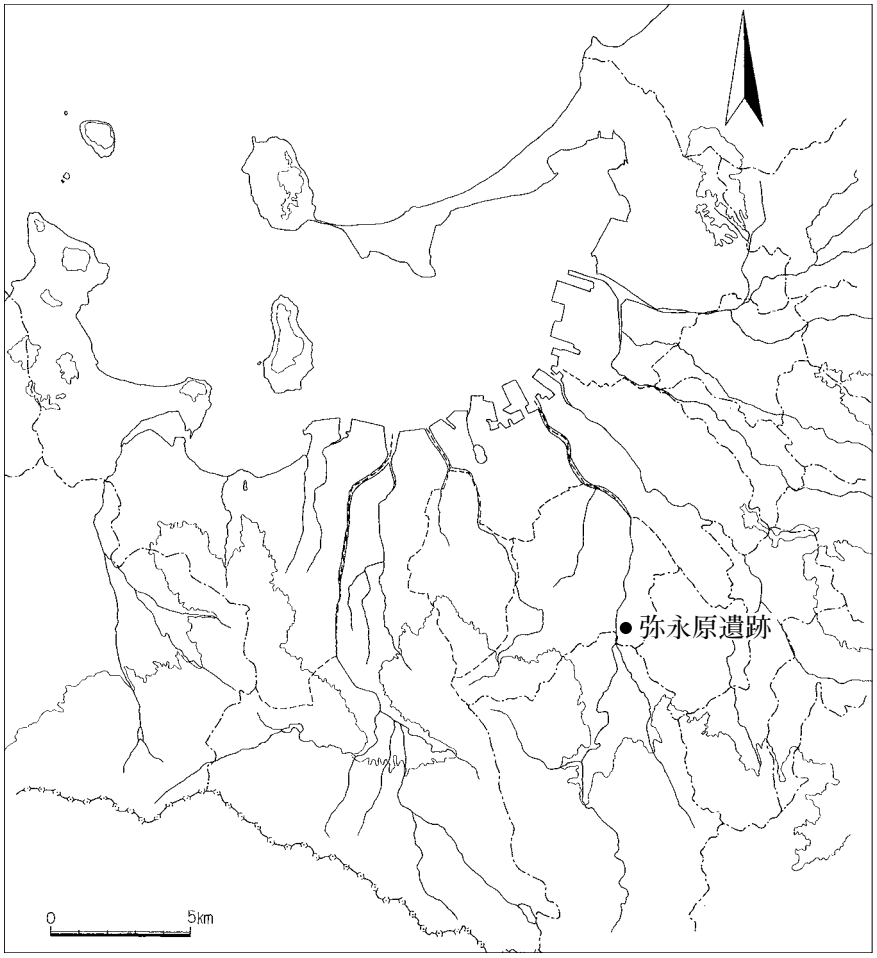
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第830集

YA NAGA BARU

弥永原遺跡 5

－第６次調査報告－



遺跡略号　YNB-6
調査番号　0201

２００４

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する弥永原遺跡第６次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで学校法人福岡女学院をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成16年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　　生田　征生

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成14年度に南区日佐３丁目42－１において実施した弥永原遺跡第６次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測は長家伸、坂本真一（現福岡県教育委員会）北川貴洋、小田祐樹が行った。
3．遺物の実測は長家、坂本、林田憲三、上田龍児が行った。
4．製図は長家、星野恵美が行った。
5．写真は長家が撮影した。なお写真１・２については『福岡女学院　85年史』（学校法人福岡女学院　1970）より転載した。また写真３・４は福岡女学院より原版をお借りし、それぞれ福岡女学院の許可を得て掲載した。
6．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から６°西偏し、真北から６°18′西偏する。
7．本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は甕棺（Ｋ）、土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓（ＳＲ）、土坑（ＳＫ）、溝（ＳＤ）、ピット（ＳＰ）である。
8．付編として、福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎氏による本調査検出の赤色顔料についての調査報告を掲載している。
9．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
10．本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	０２０１	遺跡略号	ＹＮＢ－６		
所 在 地	南区日佐３丁目42－１			分布地図番号	26-0105
開発面積	234㎡	調査対象面積	234㎡	調 査 面 積	265㎡
調査期間	平成14年４月１日～平成14年５月17日			事前審査番号	13－２－757

本文目次

Ⅰ　はじめに……5
　1　調査にいたる経過……5
　2　調査体制……5
Ⅱ　調査の記録……11
　1　遺跡の立地とこれまでの調査……11
　2　調査概要……12
　3　遺構と遺物……12
　　1）甕棺墓……12
　　2）土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓……30
　　3）土坑……39
　　4）溝……39
　　5）小結……42
付編　弥永原遺跡第６次調査で検出された赤色顔料の調査（比佐陽一郎）……43

挿図目次

第１図　調査区位置図１（1/70000）……6
第２図　調査区位置図２（1/4000）……7
第３図　調査区位置図３（1/500）……8
第４図　調査区位置図４（1/2000）……折り込み
第５図　調査区全体図（1/100）……13
第６図　Ｋ001・002実測図（1/30）……14
第７図　Ｋ001・002出土遺物実測図（1/8）……15
第８図　Ｋ003・004及び出土遺物実測図（1/30、1/6）……16
第９図　Ｋ005及び出土遺物実測図（1/30、1/8）……18
第10図　Ｋ006・007・008実測図（1/30）……18
第11図　Ｋ006・007・008出土遺物実測図（1/6、1/8）……19
第12図　Ｋ009・010実測図（1/30）……20
第13図　Ｋ009・010出土遺物実測図（1/8）……21
第14図　Ｋ012及び出土遺物実測図（1/30、1/8）……22
第15図　Ｋ013・014実測図（1/30）……23
第16図　Ｋ013・014出土遺物実測図（1/8）……24
第17図　Ｋ015・017及び出土遺物実測図（1/30、1/8）……26
第18図　Ｋ018・019・ＳＲ032及び出土遺物実測図（1/30、1/4、1/8）……27
第19図　Ｋ020及び出土遺物実測図（1/30、1/8）……28
第20図　Ｋ022及び出土遺物実測図（1/30、1/8）……29
第21図　ＳＲ011・016実測図（1/30）……30
第22図　ＳＲ021実測図（1/30）……31
第23図　ＳＲ023実測図（1/30）……32
第24図　ＳＲ024・025・026実測図（1/30）……33

第25図　ＳＲ027・028・029・030・031及びＳＲ028出土遺物実測図
(1/30、1/1)……34
第26図　ＳＲ033・034・035実測図（1/30）……36
第27図　ＳＲ036・037実測図（1/30）……37
第28図　ＳＲ038・039・040実測図（1/30）……38
第29図　ＳＫ061・062・066及びＳＫ061出土遺物実測図（1/30、1/3）……40
第30図　ＳＤ063・064・067・068・070及び出土遺物実測図
(1/40、1/1、1/3、1/4)……41

写真目次

写真１　福岡女学院及び周辺（1965年撮影）
(南西から)……47
写真２　福岡女学院及び周辺（1970年撮影）
(北東から)……47
写真３　福岡女学院及び周辺（1991年撮影）
(北東から)……48
写真４　福岡女学院及び周辺（1992年撮影）
(南東から)……48
写真５　調査区南半全景（北から）……49
写真６　調査区南半全景（北から）……49
写真７　調査区北東部全景（北から）……50
写真８　調査区北西部全景（北から）……50
写真９　調査区北東部南側（北から）……51
写真10　Ｋ001（西から)……51
写真11　Ｋ002・003（東から）……51
写真12　Ｋ004（南から)……51
写真13　Ｋ005（東から)……51
写真14　Ｋ006（南から)……51
写真15　Ｋ007（南から)……52
写真16　Ｋ008（北から)……52
写真17　Ｋ009（西から)……52
写真18　Ｋ010（北から)……52
写真19　Ｋ012（南から)……52
写真20　Ｋ013（北から)……52
写真21　Ｋ014（西から)……53
写真22　Ｋ015（南から)……53
写真23　Ｋ017（西から)……53
写真24　Ｋ018（西から)……53
写真25　Ｋ019（西から)……53
写真26　Ｋ020（南から)……53
写真27　Ｋ022（北から)……54
写真28　ＳＲ016（西から)……54
写真29　ＳＲ029（北から)……54
写真30　ＳＲ021（南から)……54
写真31　ＳＲ023（東から)……54
写真32　ＳＲ023土層 ……54
写真33　ＳＲ024（北東から)……55
写真34　ＳＲ025（東から)……55
写真35　ＳＲ026（西から)……55
写真36　ＳＲ027（南から)……55
写真37　ＳＲ028（南から)……55
写真38　ＳＲ030（南東から)……55
写真39　ＳＲ033（東から)……56
写真40　ＳＲ035（東から)……56
写真41　ＳＲ036（東から)……56
写真42　ＳＲ036土層 ……56
写真43　ＳＲ040（南東から)……56
写真44　ＳＲ011（東から)……56
写真45　ＳＲ011（南から)……57
写真46　ＳＲ011（南東から)……57
写真47　ＳＲ038（西から)……57
写真48　ＳＲ038石蓋除去後（西から)……57
写真49　ＳＲ039（北から)……57
写真50　ＳＲ039石蓋除去後（北から)……57
写真51　ＳＲ037（北西から)……58
写真52　ＳＲ037（西から)……58
写真53　ＳＫ061（南から)……58
写真54　ＳＫ062（南東から)……58
写真55　ＳＫ062土層 ……58
写真56　ＳＤ067・070東壁土層……58
写真57　出土遺物１……59
写真58　出土遺物２……60

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査にいたる経過

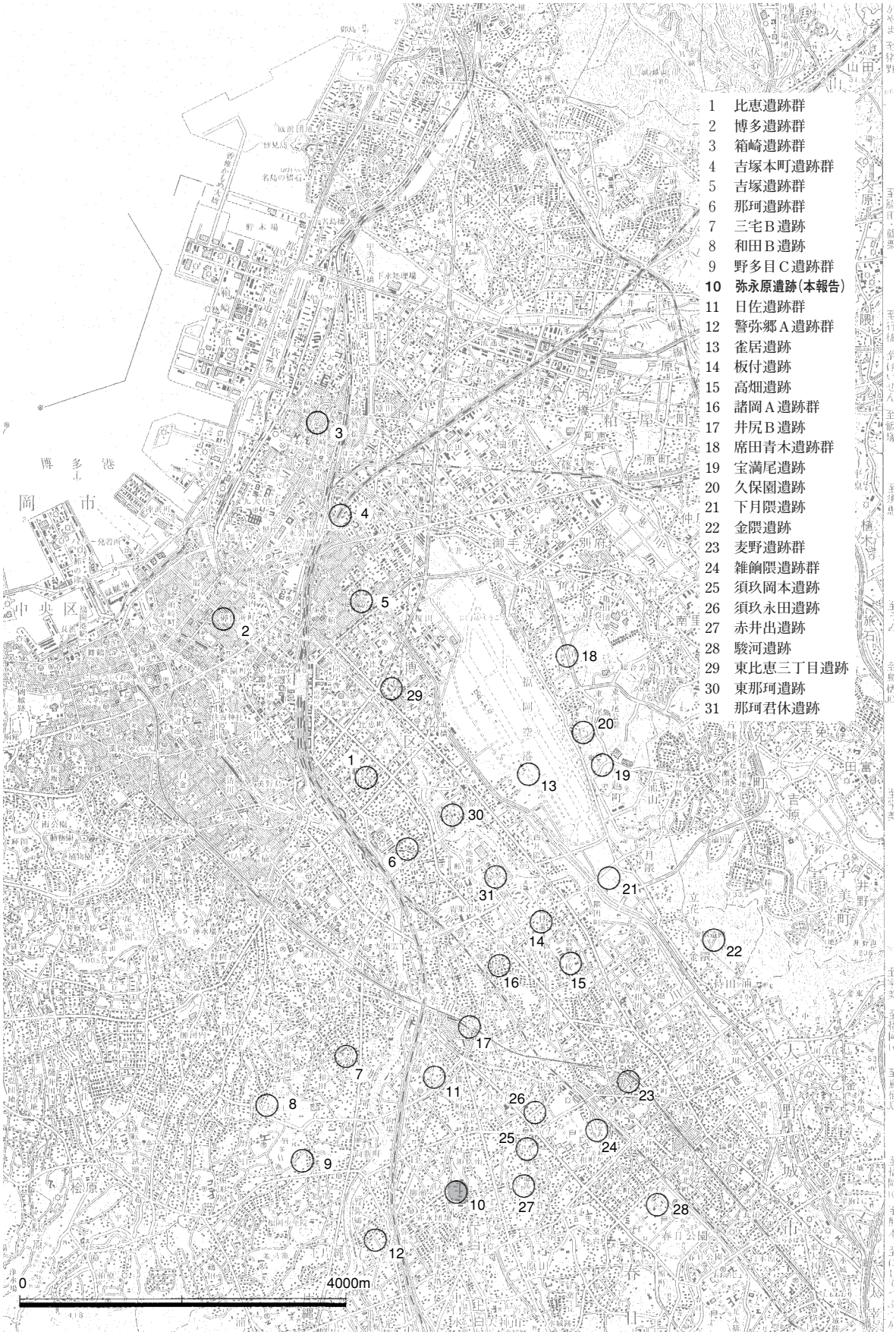
平成13年12月18日付けで学校法人福岡女学院　理事長青木順之助氏より福岡市教育委員会宛に福岡市南区日佐３丁目42－１の物件に関して、校内図書館増築に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号13－２－757）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である弥永原遺跡（分布地図番号26－0105・遺跡略号 YNB）に含まれている。更に調査対象地点は以前、同法人幼稚園の構内にあたり、昭和30年代の福岡女学院建設時に甕棺墓群として確認された地点である。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成13年12月27日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から100cmほどの鳥栖ローム層上面で甕棺を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成14年度に発掘調査、平成15年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成14年４月１日～平成14年５月17日である（調査番号0201）。調査面積は265㎡、遺物はコンテナ71箱分出土している。

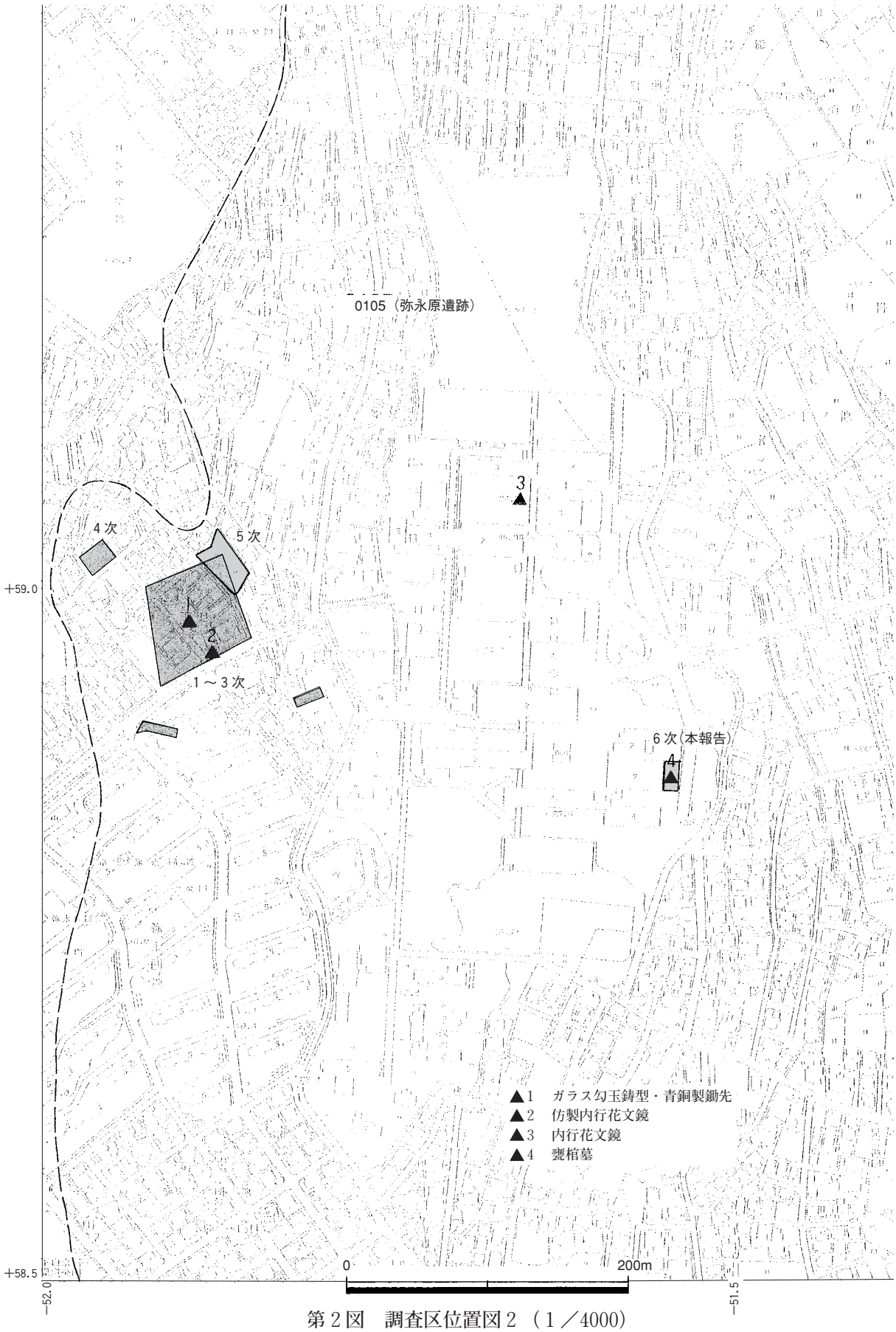
現地での発掘調査にあたっては学校法人福岡女学院の関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2　調査体制

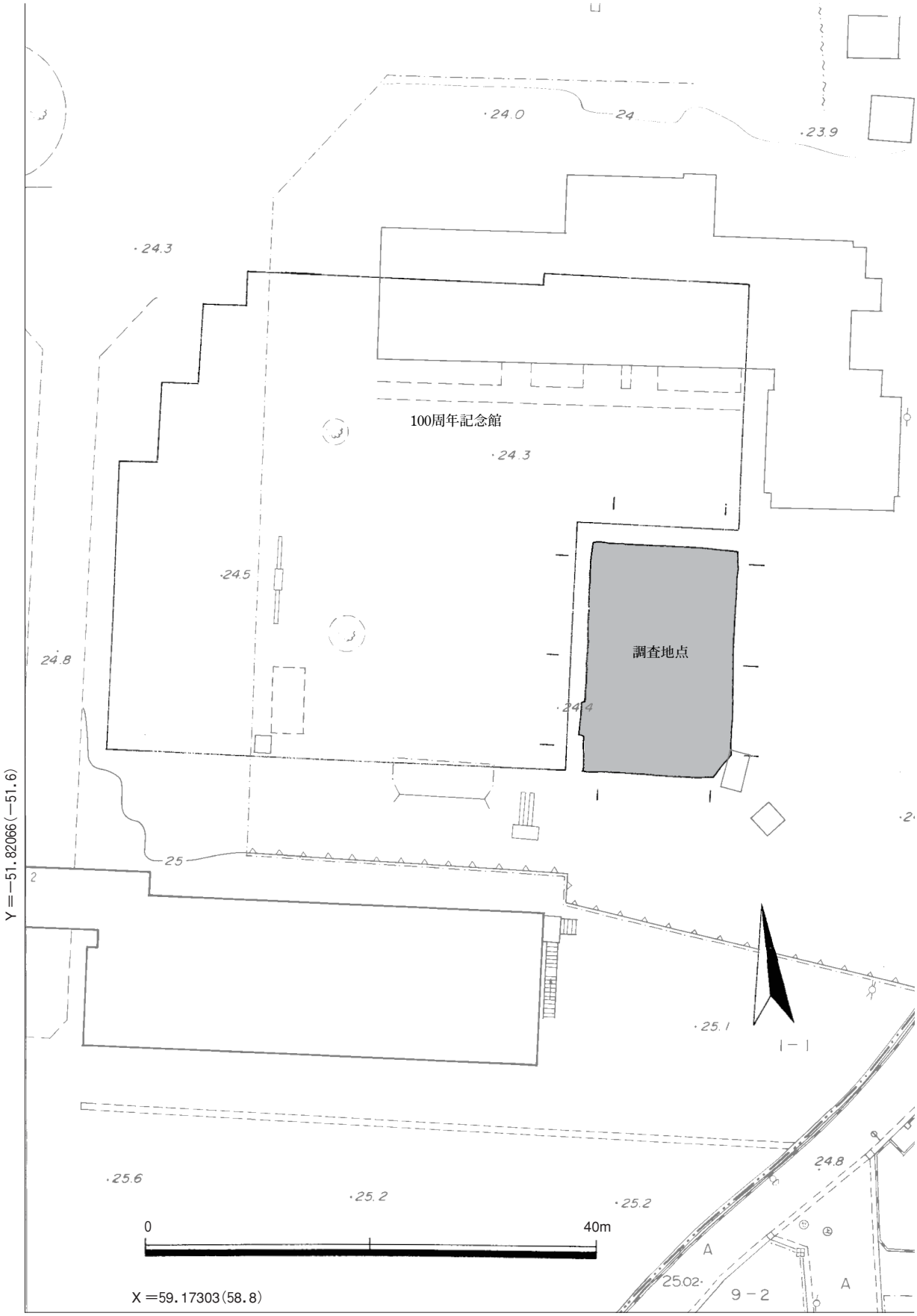
事業主体　学校法人福岡女学院
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文課財課長　　山崎純男
　　調査第２係長　　力武卓治（前任）　田中寿夫（現任）
調査庶務　文化財整備課　御手洗清
調査担当　調査第２係　長家伸
調査作業　澄川アキヨ　中村フミ子　岩本三重子　越智信孝　藤野トシ子　西山径子
　　中村サツエ　藤野幾志　西川シズ子　宮崎幸子　近藤誠一　桒野孝子　川下信弘
　　古澤義久　小田祐樹　北川貴洋　坂本真一



第１図　調査区位置図１（１／70000）

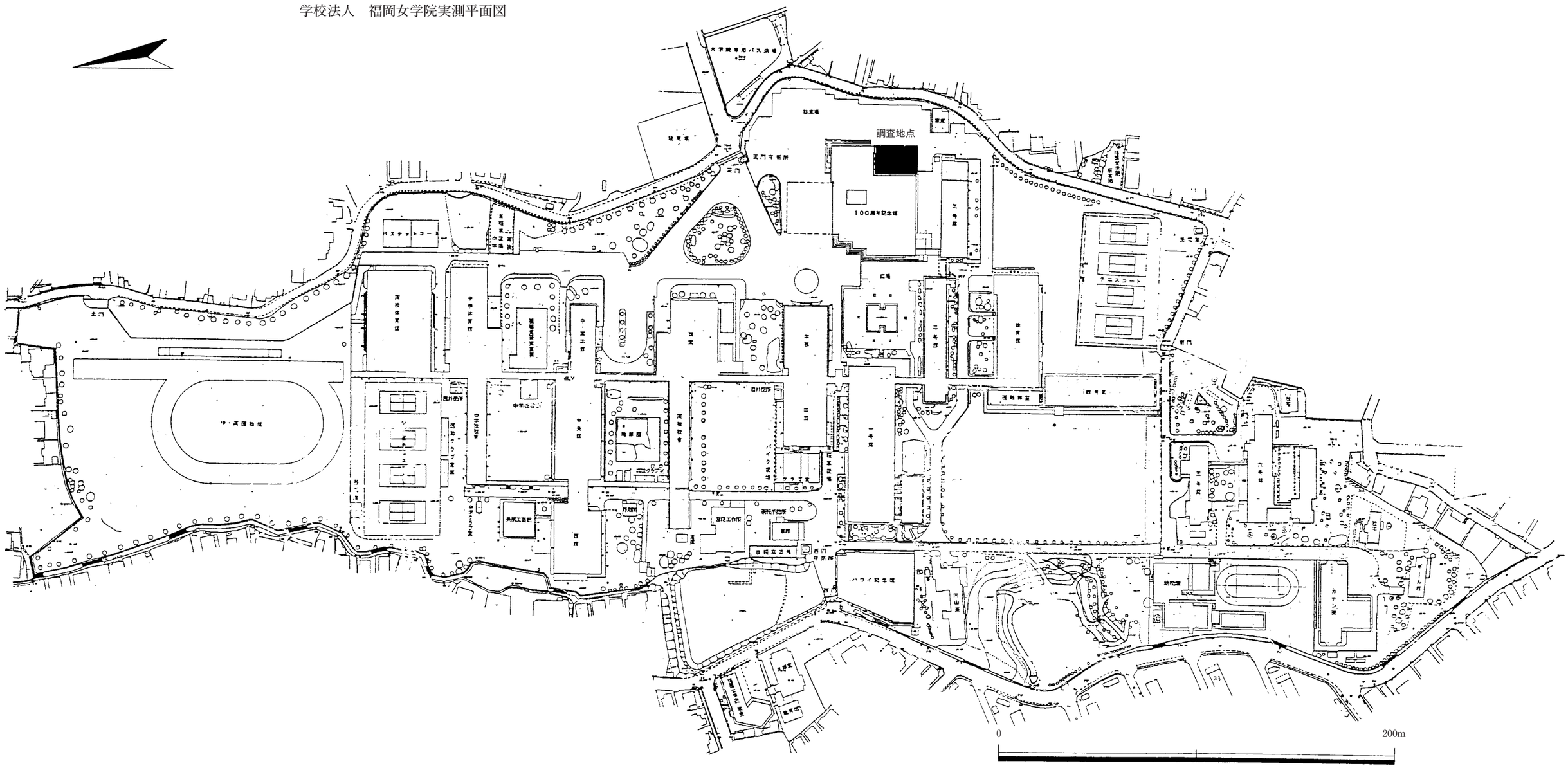


第２図　調査区位置図２（１／4000）



第３図　調査区位置図３（１／500）

学校法人　福岡女学院実測平面図



第４図　調査区位置図４（1/2000）

Ⅱ　調　査　の　記　録

1　遺跡の立地とこれまでの調査

弥永原遺跡群は福岡平野の南側に位置し、本平野を北流する那珂川と御笠川の両河川に挟まれた洪積丘陵上に立地する。両河川間には、樹状に派生する洪積丘陵群が博多湾岸の砂丘後背まで延びている。これらの丘陵は開析作用により本来複雑な地形をなしているが、現状では宅地化等諸開発のため本来の形状がわかりにくくなっている。

調査対象地は春日市と市境を接する福岡女学院校内にあたる。ここでは1958年（昭和33年）の女学院建設に伴う造成時に弥生時代の埋葬遺構群が確認されて以来、日佐原遺跡として知られていたが、福岡市の遺跡分布地図作成時に西側の低位部にあたる弥永原遺跡と統合されたようであり、現在では日佐原遺跡の名称は使用しておらず、今回も弥永原遺跡群として調査を行っている。遺跡群内の表層地質をみると、日佐原と弥永原の間には北から狭い谷が入り込んでいるが、両地点を完全に分断するには至らず、一連の洪積丘陵となっている。また地形的には日佐原が高位段丘、弥永原が中位段丘を形成し、この西側が沖積地による低位段丘となっている。

調査地点から谷を挟んで東側春日市域には、春日丘陵と呼ばれる洪積丘陵が延びており、この丘陵及び周辺沖積地には須玖岡本遺跡をはじめとする広大な遺跡群が存在し、弥生時代中期以降の集落、埋葬遺構、生産関連遺構、青銅器埋納遺構等の遺構群が濃密に分布している。特に弥生時代後期における「奴国」の中枢地域として機能したものと考えられ、特筆すべき地域である。本調査遺跡群も春日丘陵周辺の遺跡群として捉えるべきであるが、ここでは周辺遺跡群の概要は割愛し、弥永原遺跡群内でのこれまでの調査についてのみ概要を述べておきたい。

１次調査（5801）　日佐原遺跡発見の端緒となる調査である。従来の丘陵高位段丘部分の大半は現在福岡女学院の敷地内に取り込まれているが、校舎造成時に内行花文鏡が出土し、これを受けて1958年６月に福岡県及び九州大学により緊急の調査が行われている。ここでは造成に伴い丘陵尾根線上を中心に埋葬遺構群が確認された。埋葬遺構群はＡ～Ｇ群の石蓋土坑32基、箱式石棺墓19基、甕棺墓１基からなる弥生時代後期の墳墓群とＡ群の東南100mの幼稚園構内に位置する弥生時代中期の甕棺墓群が認められている。副葬品としてはＥ群―15号石蓋土坑墓から前述の内行花文鏡・玉類、Ｅ群―７号箱式石棺墓から鉄斧・鉄刀・鉄鏃・玉類がそれぞれ出土している。なお今回調査の対象とした校内図書館増築部分は旧幼稚園構内運動場東端部分にあたる場所である。1958年調査時の甕棺確認地点が具体的にどの位置に当たるのかについては現在明らかでないが、今回の調査地点周辺が１次調査において甕棺墓域として報告されていた部分である（第２図）。

（「環溝住居阯小論」（四）『史淵』第78集　鏡山猛　1959）

２次調査（6401）　1959年ガラス勾玉の鋳型が不時発見されたことを受け、1965年福岡県教育委員会・九州大学によって行われた確認調査である。これにより鋳型は弥生時代後期の環濠から出土したものと考えられた。この他には弥生時代後期の竪穴住居跡等を確認している。また１次調査鋳型出土地点から数ｍ北側で別のガラス勾玉鋳型が弥生後期の土器と共に出土する。

（『福岡県弥永原遺跡調査概要』福岡県文化財調査報告書第32集　1965）

３次調査（6601）　1967年弥永原団地建設に伴い、福岡市教育委員会によって行われた。調査範囲の多くが２次調査と重複する。Ａ地区では弥生時代後期と考えられるＶ字溝を確認している。Ｂ地区では弥生時代後期の断面逆台形を呈する溝、中期後半～後期の竪穴住居跡を確認している。後期の２号竪穴からは小形仿製鏡が１点出土している。

（三野章編　『福岡市弥永原遺跡調査概要』　福岡市住宅供給公社・福岡市教育委員会　1967）

４次調査（8824）　1988年公園建設に伴う発掘調査である。撹乱が著しく遺存状態はきわめて不良である。弥生時代後期溝１条、古墳時代後期竪穴住居跡等を確認する。

（「柳瀬東公園（弥永原遺跡群第４次）の調査」『公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』
福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集　1990）

５次調査（9653）　３次調査（市営住宅）北東側に隣接する。弥生後期の竪穴住居跡を確認する。

（『弥永原遺跡４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第604集　1999）

以上のように、弥永原遺跡群の調査については中位段丘面の調査が主体となり、高位面は１次調査以来今回が２度目の調査である。造成以後、高位面はその大部分が学校用地として使用されており、特に丘陵尾根線部分は数ｍに及ぶ地下げが行われていると考えられる。このため丘陵縁辺部分の遺構がかろうじて残存しているのみであると想定され、今回の調査地点もそのような丘陵縁辺の斜面にあたる地点である。

２　調査概要

調査対象地点は現状で未舗装の平地となっていた。標高は24.6ｍを測る。なお調査標高は１／500道路台帳より引用し、女学院正門前交差点中央の春日市汚水枡中央を標高22.8ｍの基点としてレベル移動を行っている。調査廃土を場内処理する必要から当初南半部分の調査を行い、終了後土砂反転して北半部分の調査を行った。遺構面は鳥栖ローム層上面及びこの上部に残る黒色土上面である。また中央部東西方向に造成前の旧耕作土に伴う段がついており、北側が一段低くなっている。遺構面レベルは南半高位部が標高24.0ｍ、北側低位部は西側が23.6ｍ、北東隅が23.3ｍとなっている。削平により旧地形は不明瞭であるが、鳥栖ローム層のレベルから本来は東～北東方向に傾斜する地形であったと考えられ、旧表土が全く失われている調査地の東辺側は校内造成時に削られたものと考えられるが、旧耕作土の残る北東側は校舎造成では遺構面まで削平が及ばなかったものと考えられる。

検出遺構は甕棺19基、土坑墓17基、石蓋土坑墓２基、石棺墓２基、他溝・土坑・ピットがある。遺構の大半は南半部分に偏っており、特に埋葬遺構は南半のみに位置している。北西側の低位部分には掘り込みのしっかりしないピットが検出されるのみで、遺構分布の縁辺を示すものと考えられる。遺構の主体は40基の埋葬遺構で、このうちSR028から小玉１点及びK010、SR023、SR025、SR028、SR037、SR039の６基から水銀朱の塗布が認められたが、その他の副葬品は出土していない。

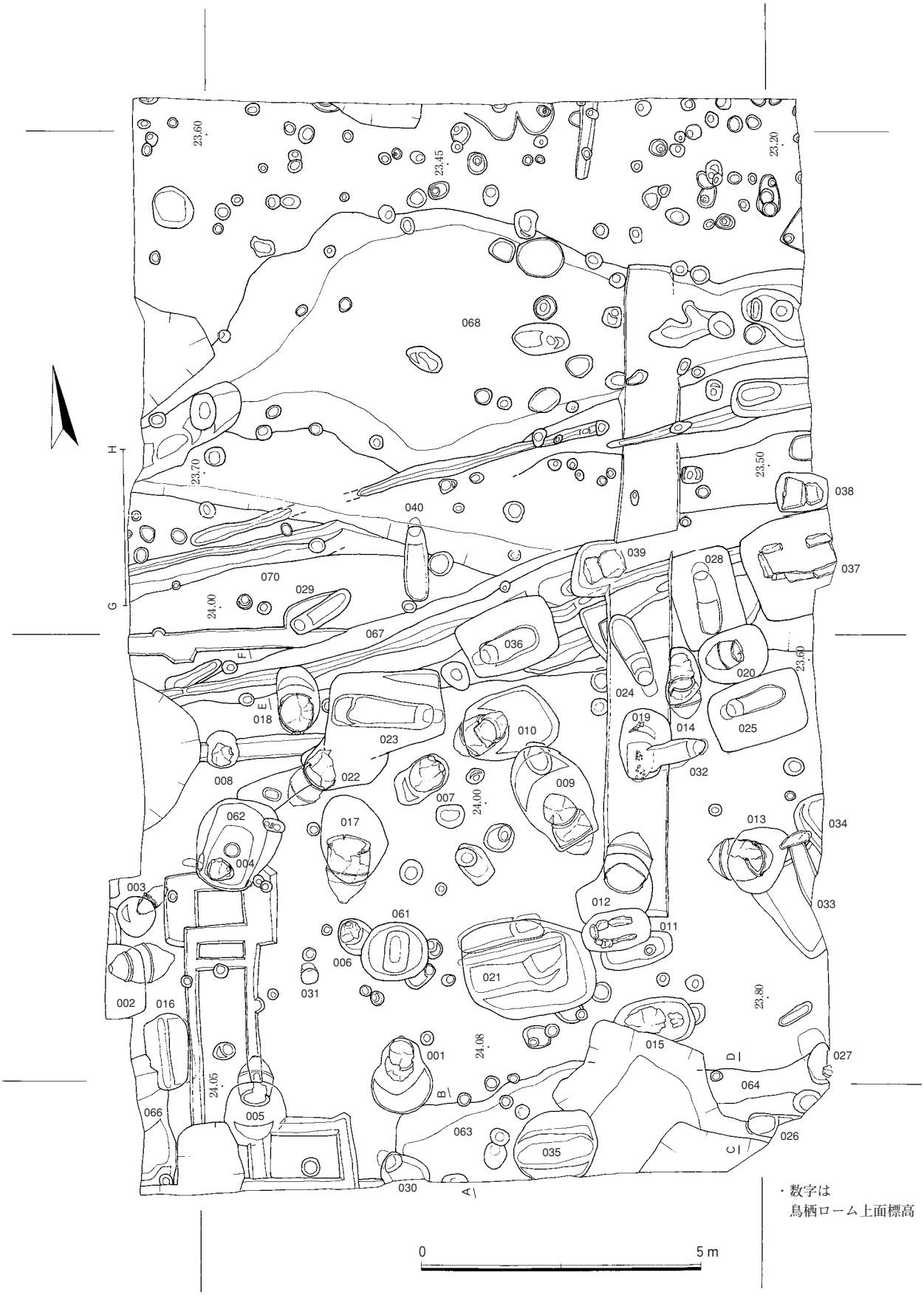
３　遺構と遺物

１）甕棺墓（K）

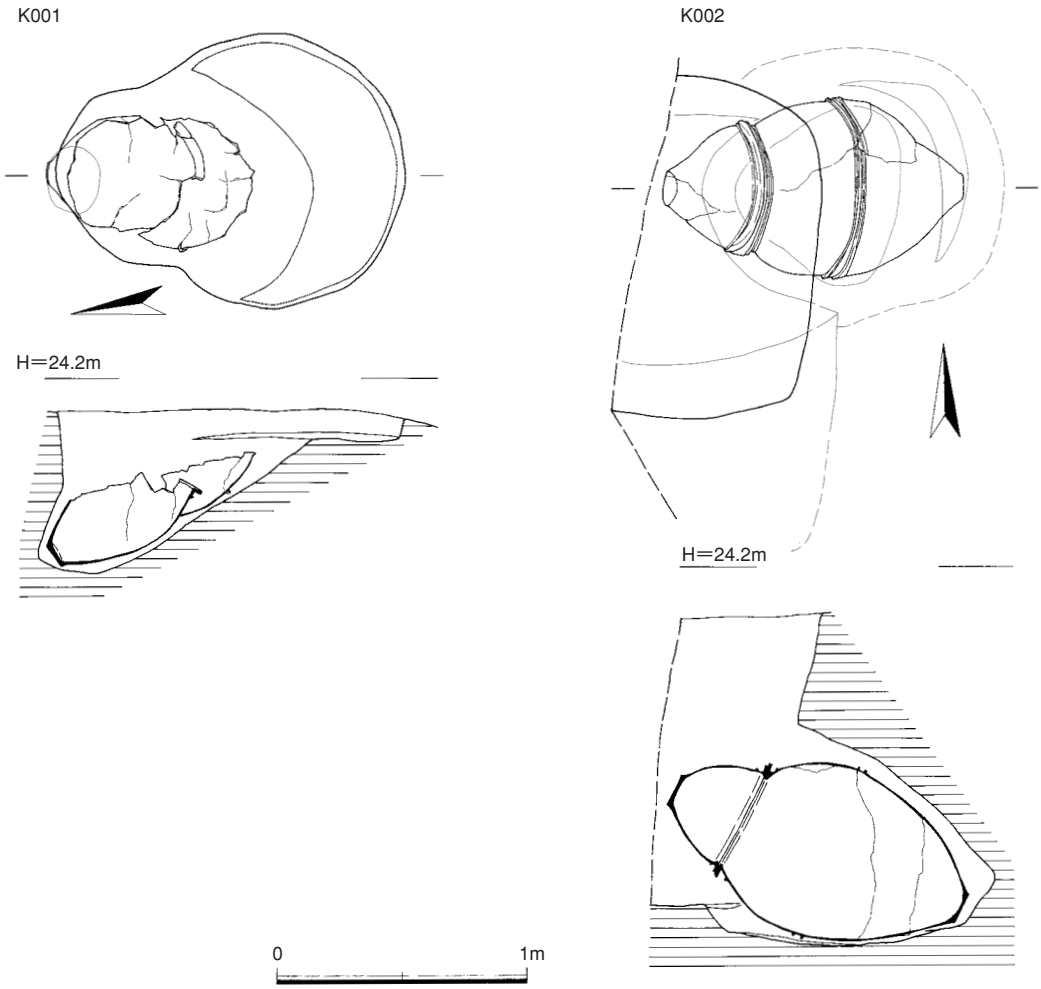
甕棺は19基確認している。小形棺４基、中～大形棺15基である。甕棺墓を含む埋葬遺構は前述のように調査地点の南半分に偏って配されている。埋葬方向は東西方向と南北方向の両者が存在するが、現状では特に配列・群構成にまとまりは見出せない。更に墓域は現状で北限の一部を確認しているのみで、他３方向には更に広がるものと考えられる。

K001（第６図）

南側端部で検出した覆口式の中形棺である。主軸方向はN―９°―Eにとり、埋置角度は36°である。南側端部をSD063とわずかに切り合うが、先後関係は不明である。上下側に甕を用いるが、上甕は口縁部を打ち欠いて使用している。墓坑は南側に平坦面を有しそこから斜坑を掘り込んでいる。



第５図　調査区全体図（１／100）

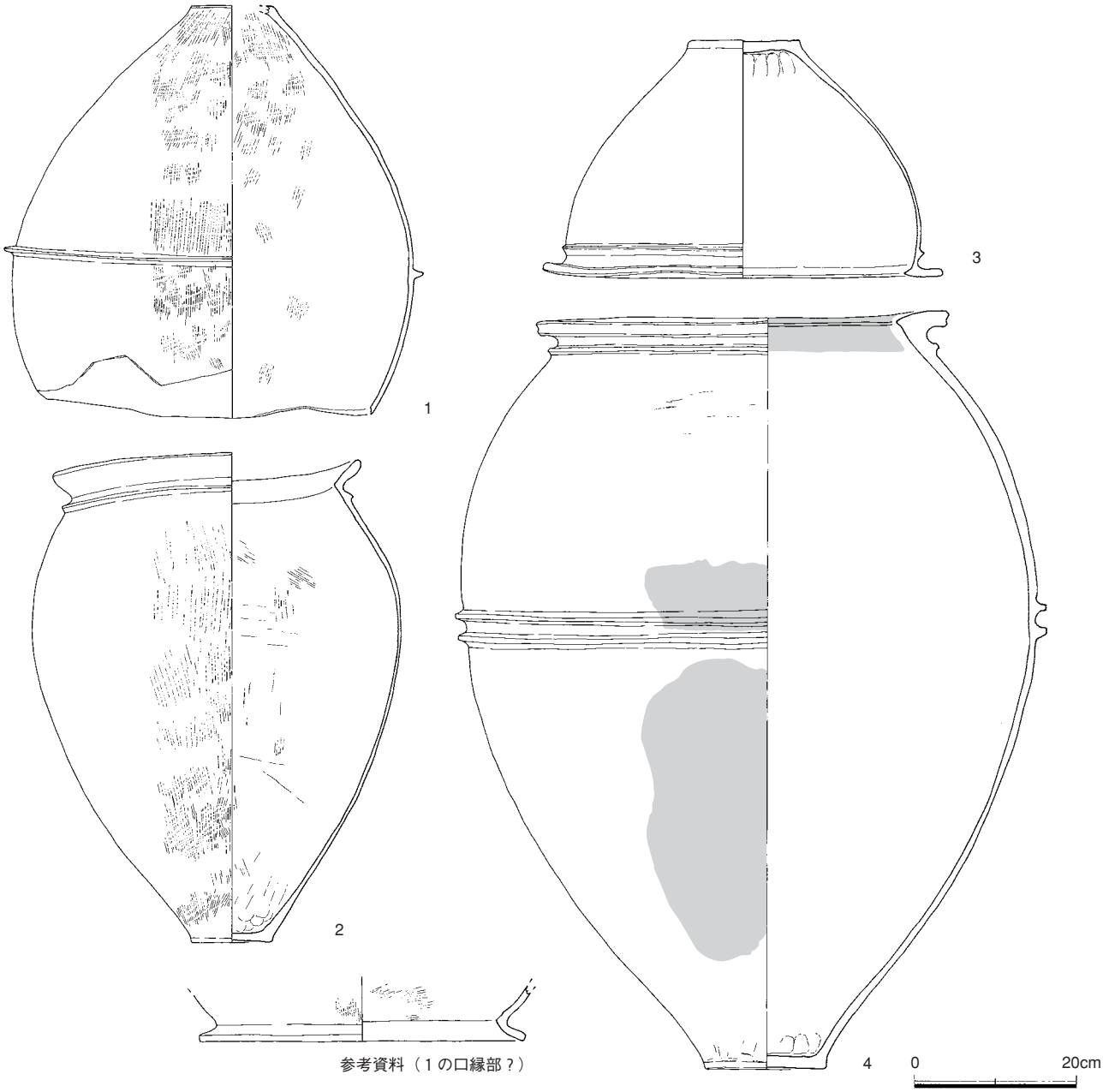


第６図　K001・002実測図（１／30）

出土遺物（第７図　１・２）

１は上半を打ち欠く甕である。現存器高50cm、復元底径10cm を測る。胴部最大径は49.5cm で、胴部中位の突帯貼付位置にある。胴部外面は縦刷毛の後粗くナデ消しているが、全体に刷毛目が明瞭に残っている。内面にも縦刷毛が行われるが、底部付近はほとんどナデ消していない。中位以上には縦方向に行われている擦過状のナデにより、刷毛目の多くを消している。淡橙色を呈し、焼成は良好である。なおこの甕棺は口縁部を打ち欠いて使用しているが、上甕として取り上げた遺物の中に、これと接合する可能性を有する口縁部破片が出土している。全周の１／６程度の破片であるが、接合はできていない。しかし色調・胎土・調整等の類似点より、同一個体である可能性は高いものと考えられる。ここでは参考資料として図示しておく。

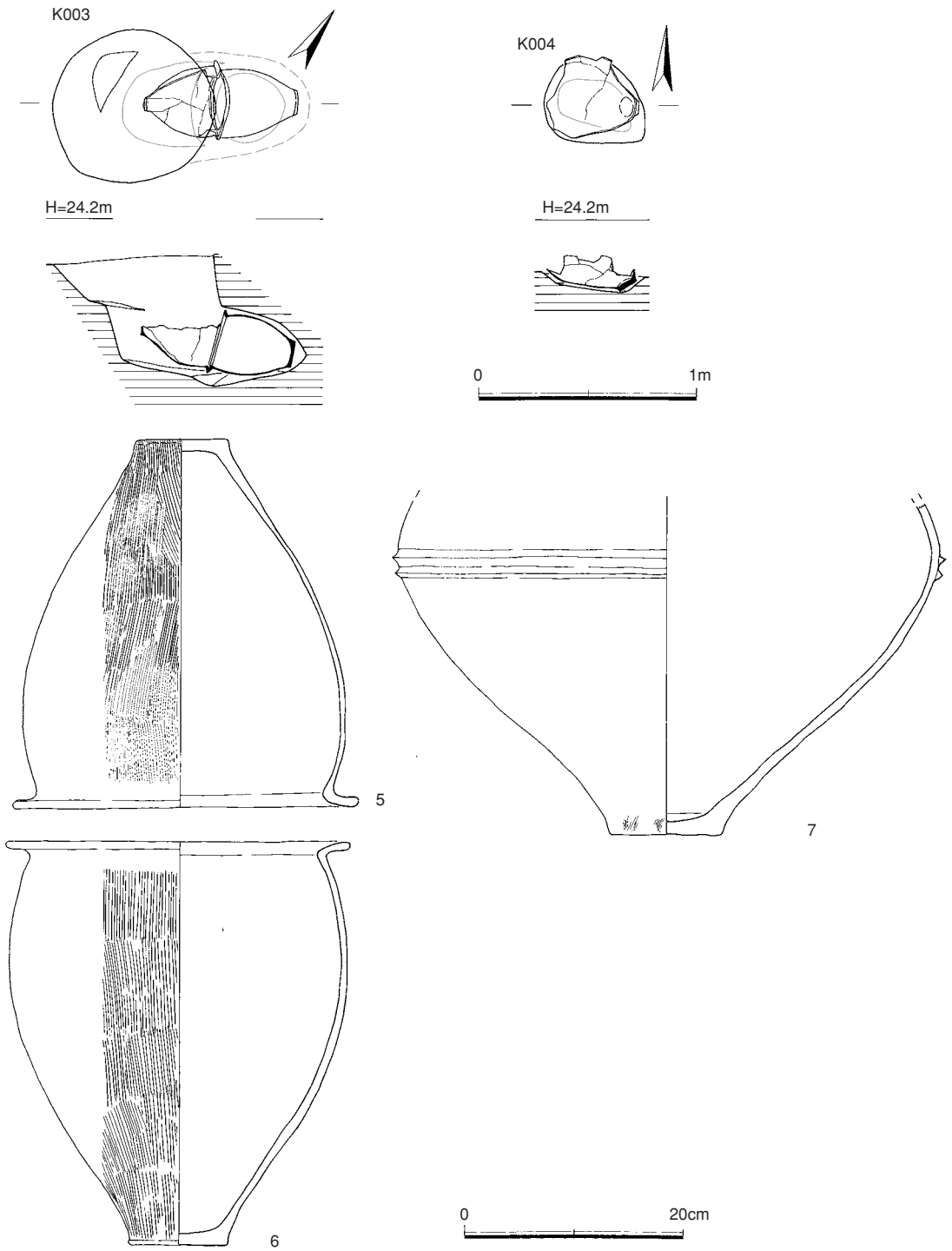
２はほぼ完存する下甕である。口径38.2cm、器高60.6cm、底径10cm を測る。胴部最大径は45.6cm で、胴部のやや上位にある。口縁部はく字状に屈曲し、外面が肥厚しているためやや内湾気味に見える。突帯は口縁下に三角突帯が１条貼付される。口縁部は横ナデにより、胴部は縦刷毛の後ナデを行う。ナデは内面でより丁寧に行われ、外面下半では特に刷毛目がよく残っている。にぶい橙色を呈し、焼成良好である。



第７図　K001・002出土遺物実測図（１／８）

K002（第６図）

西側端部で検出した接口式の大形棺である。主軸方向はN―87°―Wにとり、埋置角度は23°である。上甕に鉢、下甕に甕を用いている。墓坑は西側が未掘となるが、上面は幅1.4mの（長）方形に掘削されていると考えられる。検出面から40cmまでは竪坑南側に平坦面を有しそこから斜坑を掘り込み、墓坑の深さは1.3mを測る。墓坑底面は緩やかなくぼみ状となり、西側には15cm程高い平坦面を有している。また墓坑の南側壁の南～東側部分では70cm程の竪坑の下部を奥へ80cm程抉り込んで掘削されている。



第８図　K003・004及び出土遺物実測図（１／30、１／６）

出土遺物（第７図　３・４）

３は上甕に使用されたほぼ完形の鉢である。口径49.4cm、器高29.5cm、底径13.7cm を測る。口縁部はやや内側に張り出し、上面は水平となる。突帯は口縁下に三角突帯１条を貼付する。内外面に丁寧なナデ調整を行う。橙色を呈し、焼成良好である。

４はほぼ完形の下甕である。口径50cm、器高94cm、底径14.8cm を測る。胴部最大径は70.5cm で、

胴部中位の突帯貼付位置にある。口縁部上面ははやや内傾している。突帯は口縁下にコ字形突帯１条、胴部中位に２条のコ字形突帯を貼付する。内外面には丁寧なナデ調整を行い、底部付近に板状工具の小口痕跡が残っている。口縁部上面の一部と胴部の一部に黒色顔料の塗布が認められ、本来は外面全体に黒塗りが行われた可能性が考えられる。現状の器表面は淡黄色～淡橙色を呈し、焼成良好である。

K003（第８図）

K002の北側で検出した接口式の小形棺である。主軸方向はN―56°―Eにとり、埋置角度は14°である。上甕・下甕ともに甕を用いる。墓坑は上面が径70cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。検出面から20cmまでは竪坑を掘削し、そこから斜坑を掘り込んでいる。墓坑底面は緩やかなくぼみ状となり、西側には５～10cm程高い平坦面を有している。

出土遺物（第８図　５・６）

５は完形の上甕である。口径30.2cm、器高33.5cm、底径8.2cmを測る。底部は平底で、口縁部はやや内傾している。胴部内面は丁寧なナデを行う。外面には全体に縦刷毛が残る。淡橙色を呈し、焼成良好である。

６は完形の下甕である。口径30.5cm、器高36.6cm、底径8.9cmを測る。５同様に底部は平底で、口縁部はやや内傾している。内面ナデ、外面縦刷毛を施す。淡橙色を呈し、焼成は良好である。

K004（第８図）

SK062の上面で検出した壺を用いた小形棺である。削平により下甕の一部が残存するのみで、上甕については不明である。主軸方向はN―88°―Eにとり、埋置角度はおおよそ26°である。墓坑は底面部分を確認したのみであるが、この部分で45cmの不整円形を呈し、深さ10cmを測る。

出土遺物（第８図　７）

胴部の１／２程度が残存する壺である。残存器高30.1cm、底径10.2cm、胴部最大径49cmを測る。内外面ナデ調整を行うが、底部付近に僅かに刷毛目状の痕跡が残る。

K005（第９図）

調査区南端で検出し、K001の２ｍ東側にこれと並行に配置される単棺の大形棺である。主軸方向はN―15°―Eにとり、埋置角度は32°である。墓坑は径1.1mの円形～隅丸方形を呈し、底面までの深さ90cmを測る。掘り方は検出面から20cmまで竪坑を掘削し、以下斜坑を掘り込んでいる。

出土遺物（第９図　８）

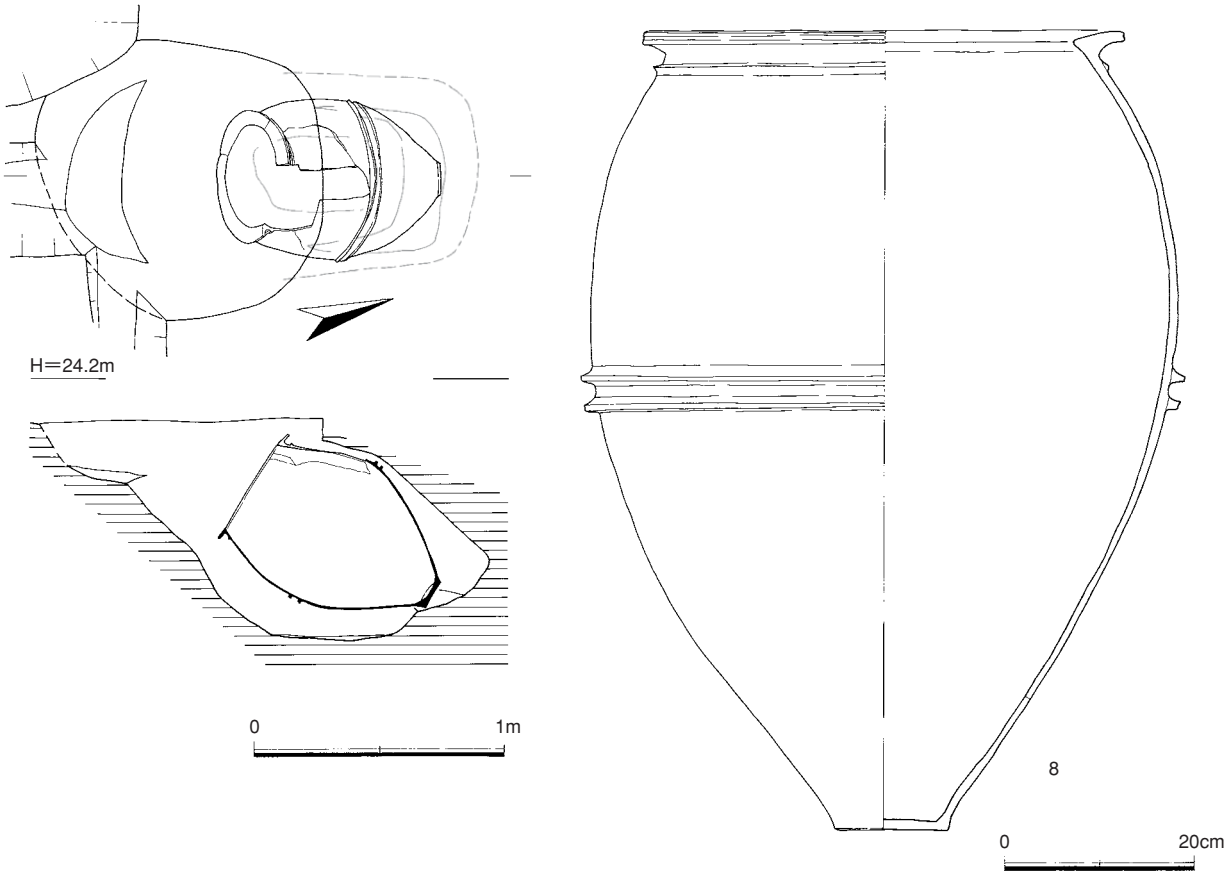
ほぼ完形を呈する。口径51cm、器高85cm、底径12cmを測る。胴部最大径は62cmで、突帯貼付位置のやや上方にある。口縁部はやや内傾している。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に２条のコ字形突帯を貼付する。内外面ナデ調整を行うが、胴部表面には縦横ランダムにナデを行った痕跡が残っている。淡黄色を呈し、焼成良好である。

K006（第10図）

SK061に掘り方の南側を切られる小形棺である。削平により下甕の一部が残存するのみである。主軸方向はN―７°―Wにとり、埋置角度はおおよそ35°である。墓坑は底面部分を確認したのみであるが、南側に一段平坦面を有し、これから10cm掘り込んで底面に至っている。掘り方平面は70cmの長円形を呈し、深さ20cmを測る。なお遺物取り上げ時には気が付いていなかったが、接合時に２個体分の破片を確認しており、上甕が崩落したものが下甕内に転落して残ったものと考えられる。

出土遺物（第11図　９・10）

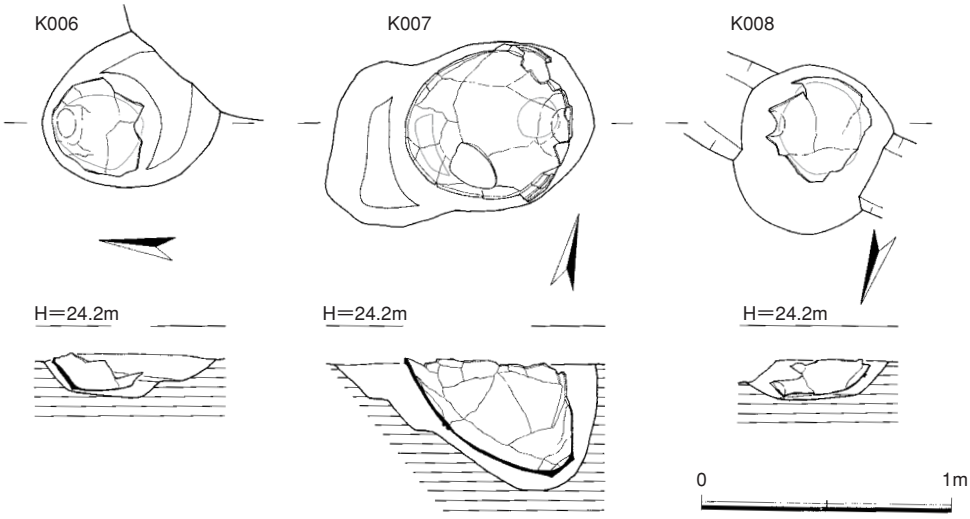
９は図示前に取り上げたもので、下甕内に崩落していたと考えられる上甕の破片である。口縁部は打ち欠いたものと考えられ、底部及び胴部中位部分が残存している。底部はやや上げ底気味の平底で、



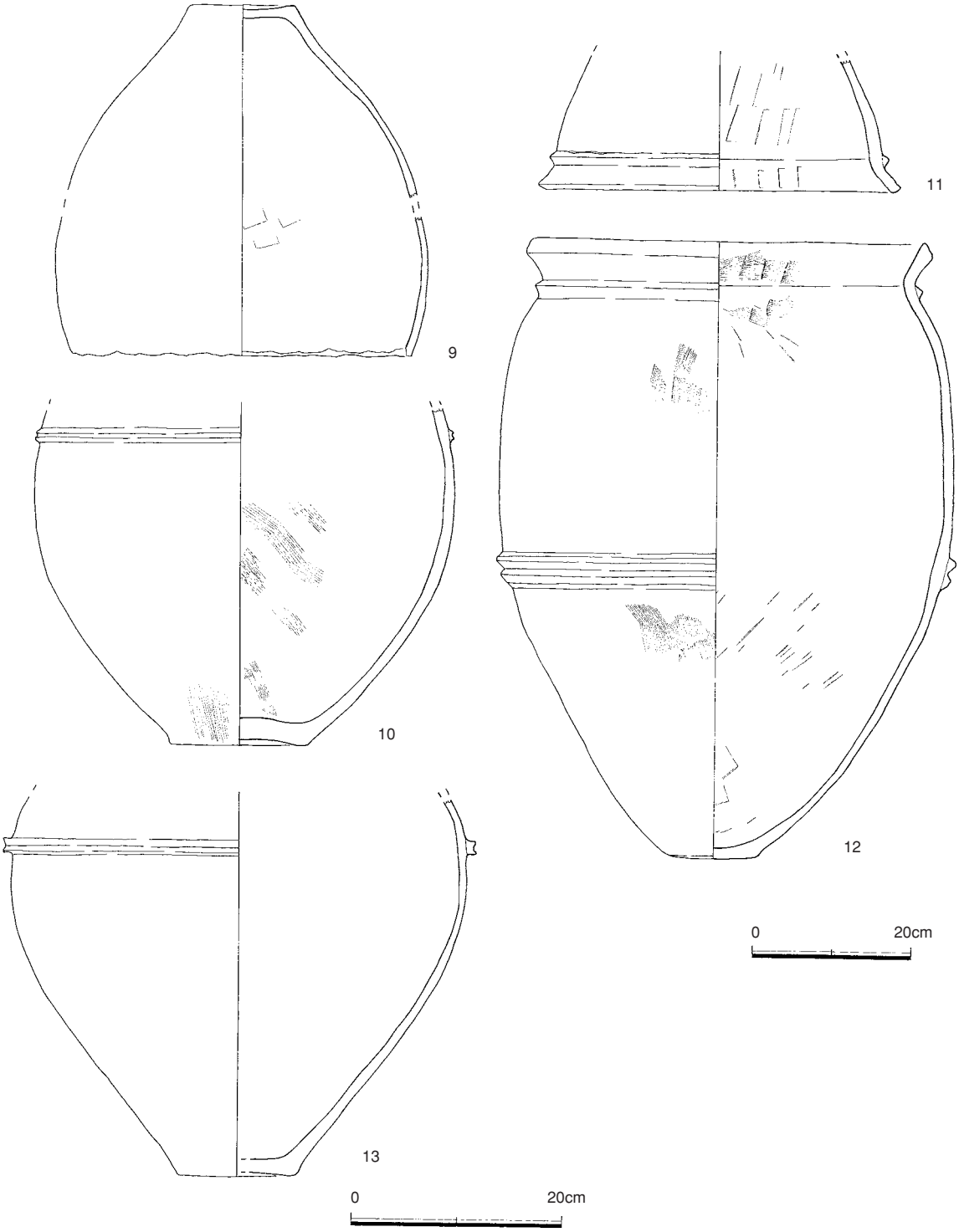
第９図　K005及び出土遺物実測図（１／30、１／８）

径10cm を測る。内外面丁寧なナデ調整を行う。胎土は精選されており、淡橙色を呈する。

10は下半の１／２程度が残存する。残存器高31.8cm、底径13cm、復元胴部最大径は39.6cm を測る。胴部に１条のＭ字形突帯を有する。内外面ナデ調整を行うが、両面共に消し残した刷毛目が残っている。外面浅黄色、内面橙色を呈する。



第10図　K006・007・008実測図（１／30）



第11図　K006・007・008出土遺物実測図（９・10・13は１／６、11・12は１／８）

K007（第10図）

調査区中央部分で検出した大形棺である。削平により下甕の一部が残存するのみである。主軸方向はN―76°―Eにとり、埋置角度はおおよそ47°である。下甕には甕を用いている。墓坑の平面規模は105×60cmを測り、底面までの深さは50cmである。掘り方は棺体に添うように斜めに階段状に掘削されている。なお取り上げ時に下甕とは別個体と考えられる個体の口縁部破片が出土しており

(11)、これを上甕の一部と考えている。

出土遺物（第11図　11・12）

11は下甕内に転落したと考えられる上甕の可能性を有する口縁部破片である。復元口径44cm を測る。口縁部は緩くく字状に折れ曲がり、頸部外面には三角形突帯が貼付される。内外面は板状工具ナデを行い、内面には横方向の連続した小口痕が残っている。

12は上半の２／３を欠失している下甕である。復元口径49.2cm、復元器高77cm、底径11cm、胴部最大径は57.2cm を測る。底部は僅かにレンズ状を呈する。また口縁部はく字状に屈曲し、頸部外面には１条の三角形突帯を貼付する。胴部中位には形状の乱れた２条のコ字形突帯を貼付する。内外面ナデ調整を行うが、胴部外面及び口縁部内面には刷毛目が残っている。色調は淡橙色を呈する。

K008（第10図）

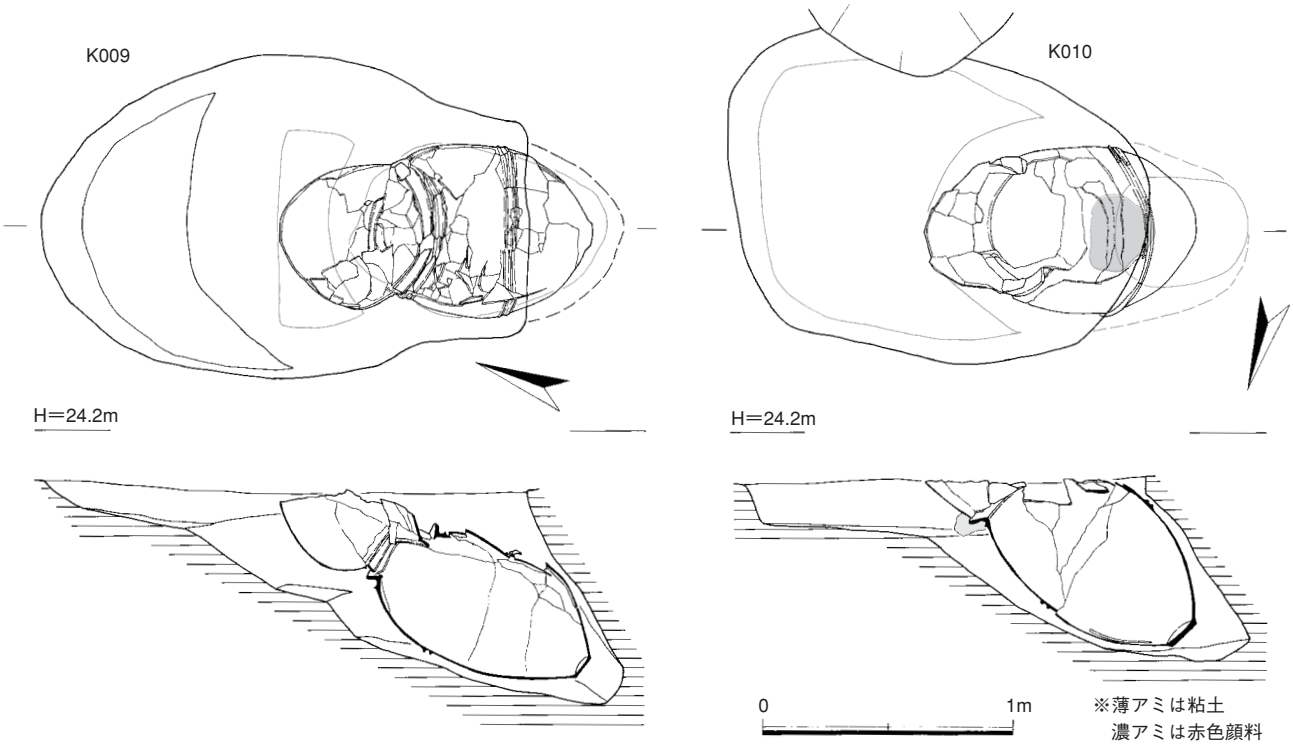
調査区西側で検出した小形棺である。削平により下甕の一部が残存するのみである。主軸方向はN—70°—E にとり、埋置角度はおおよそ30°である。下甕に甕を用いている。墓坑は底面部分を確認したのみであるが、この部分で径65cm の円形を呈し、深さ15cm を測る。

出土遺物（第11図　13）

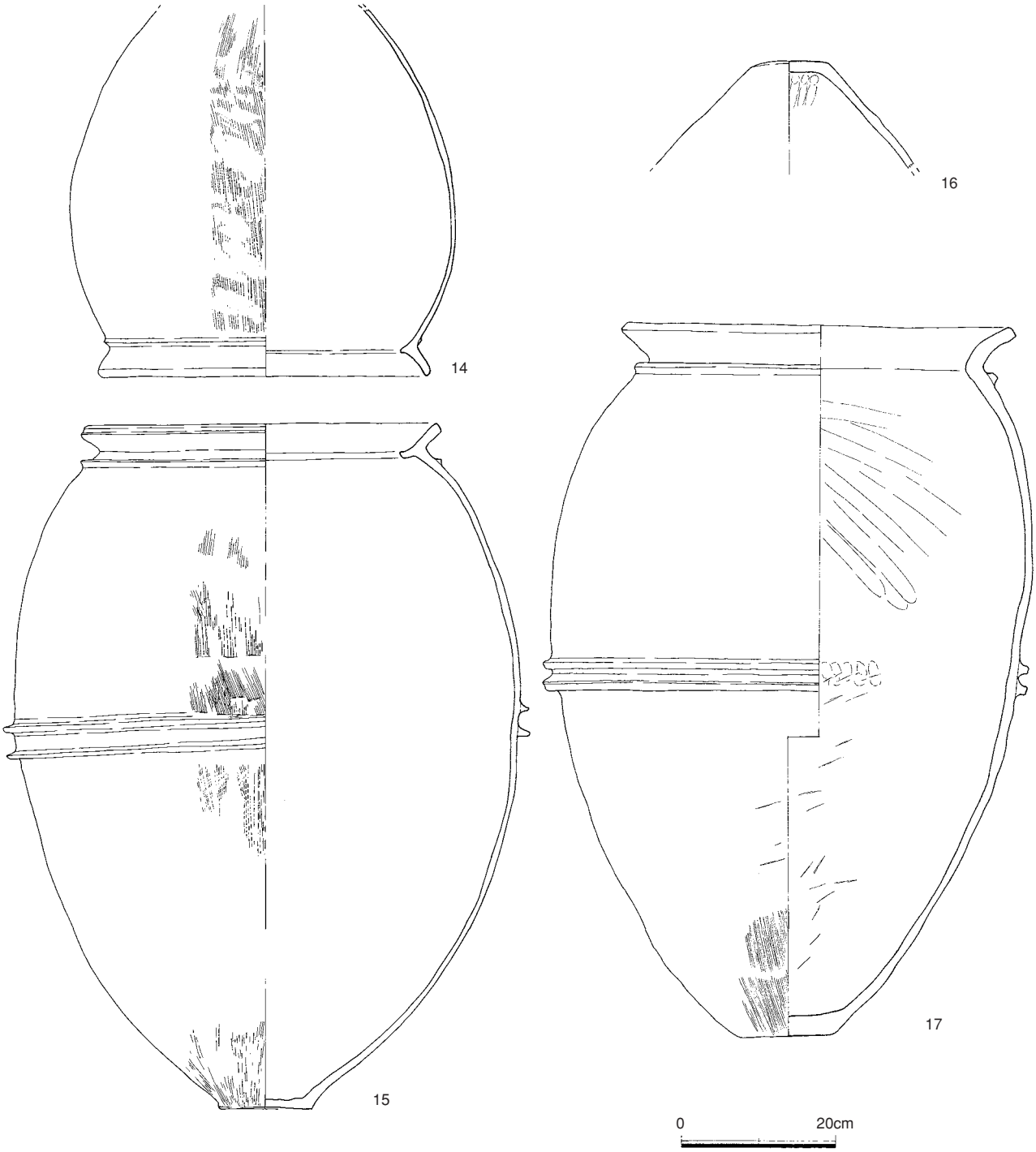
下半の１／３程度が残存するのみである。残存器高35.6cm、底径11cm、復元胴部最大径43.2cm を測る。底部は平底である。また突帯は胴部中位に１条のＭ字形突帯を貼付する。内外面ナデ調整を行う。

K009（第12図）

調査区中央部部分で検出した大形棺である。調査時には切り合いから K010→ K009の関係となるものと考えたが、出土甕棺をみると切り合いが逆転している様である。上甕の一部が削平により失われている。主軸方向はN—20°—Wにとり、埋置角度はおおよそ38°である。墓坑は崩落により南側部分が乱れているが、本来は上面130×170cm の長円形を呈するものと考えられる。現状で検出面から



第12図　K009・010実測図（１／30）



第13図　K009・010出土遺物実測図（1／8）

底面までの深さは85cm である。掘り方は棺体に添うように階段状に平坦面を有しながら掘削されている。

出土遺物（第13図　14・15）

14は上半部分のみが残る上甕である。口径42.5cm、残存器高48cm を測る。胴部最大径は50.2cm で、胴部上部に位置している。口縁部は内湾し、頸部外面に三角突帯が1条貼付される。内外面ナデ調整を行うが、胴部外面には消し残した刷毛目が比較的明瞭に観察できる。

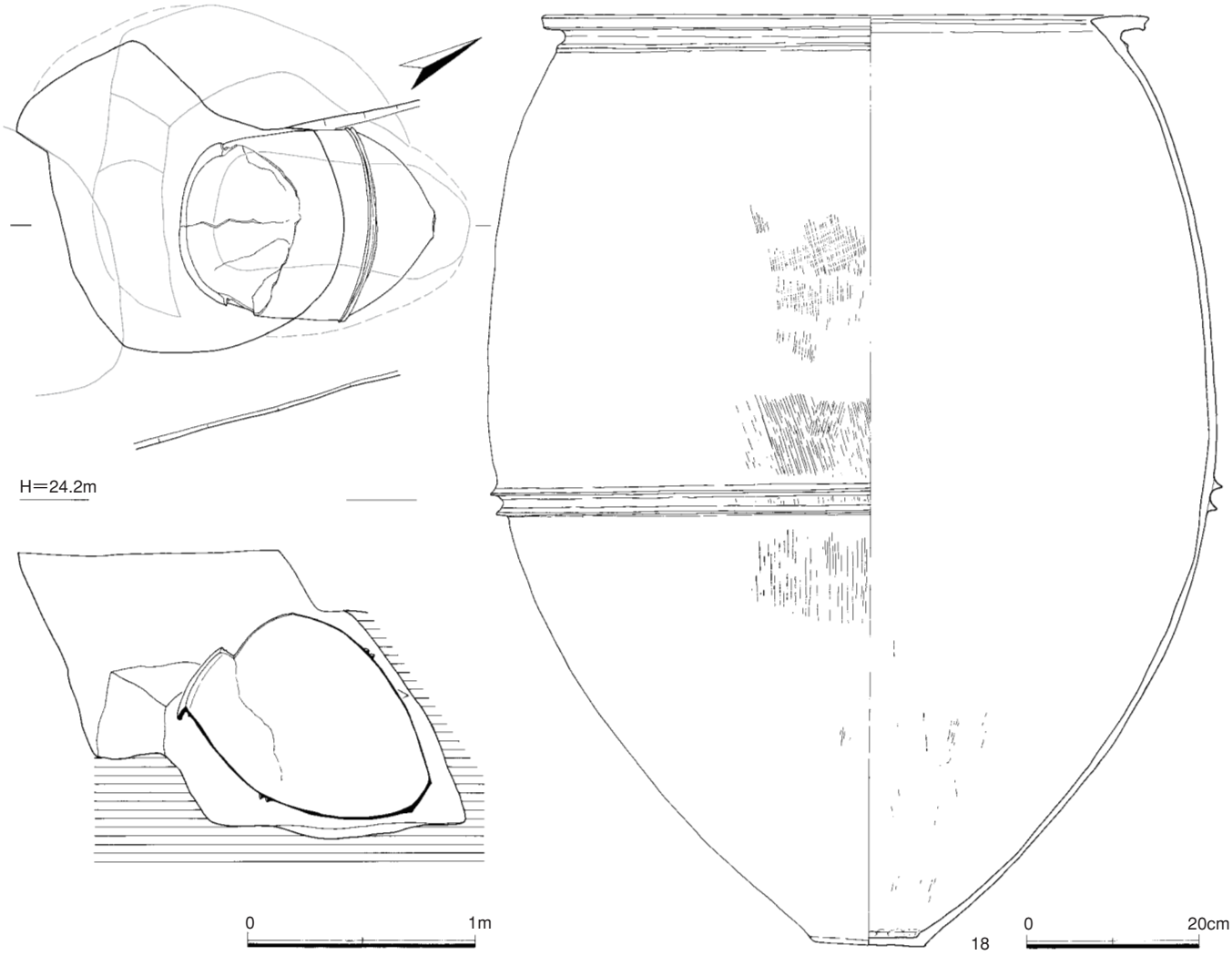
15は完形の下甕である。口径45.6cm、器高89.9cm、底径12.6cm を測る。胴部最大径は66cm で、突帯貼付位置にある。口縁部は大きく内傾・内湾し、内側に明瞭に張り出している。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に２条のコ字形突帯を貼付する。内外面ナデ調整を行うが、胴部外面はナデが粗く、縦刷毛がよく残っている。色調は淡黄色を呈する。器面の摩滅が進んでいるが、焼成は良好である。

K010（第12図）

調査区中央部部分で検出した大形棺で、K010→ K009の関係となる。上甕の大半と下甕の一部が削平により失われている。主軸方向は N―70°―E にとり、K009と主軸方向を直交させている。また埋置角度はおおよそ44°である。墓坑は165×120cm を測り、検出面から底面までの深さは70cm である。掘り方は一段平坦面を有し、以下は棺体に添うように斜方向に掘削されている。上甕は口縁部を打ち欠いており、下甕と接口する部分には目張りの白色粘土が行われている。また下甕の底面近くに30×25cm の範囲で水銀朱が認められた。

出土遺物（第13図　16・17）

16は上甕であるが、上半部分が接合せず、底部付近のみを図化している。図上では底部は認められ



第14図　K012及び出土遺物実測図（１／30、１／８）

ないが、削平時等に転落したものであろう。底部は僅かにレンズ状を呈し、底径10cm を測る。調整は内外面ナデを行う。

17は上半の１／４を欠く甕である。復元口径49.6cm、器高92.7cm、底径12.3cm、胴部最大径は62.5cm を測る。口縁部は外湾するく字状を呈し、口縁下に三角突帯を１条貼付する。また胴部中位には２条のコ字形突帯を有する。内外面ナデ調整を行うが、外面下端部分には縦刷毛が残る。底部は僅かに丸みを有する。浅黄橙色を呈し、焼成良好である。

K012（第14図）

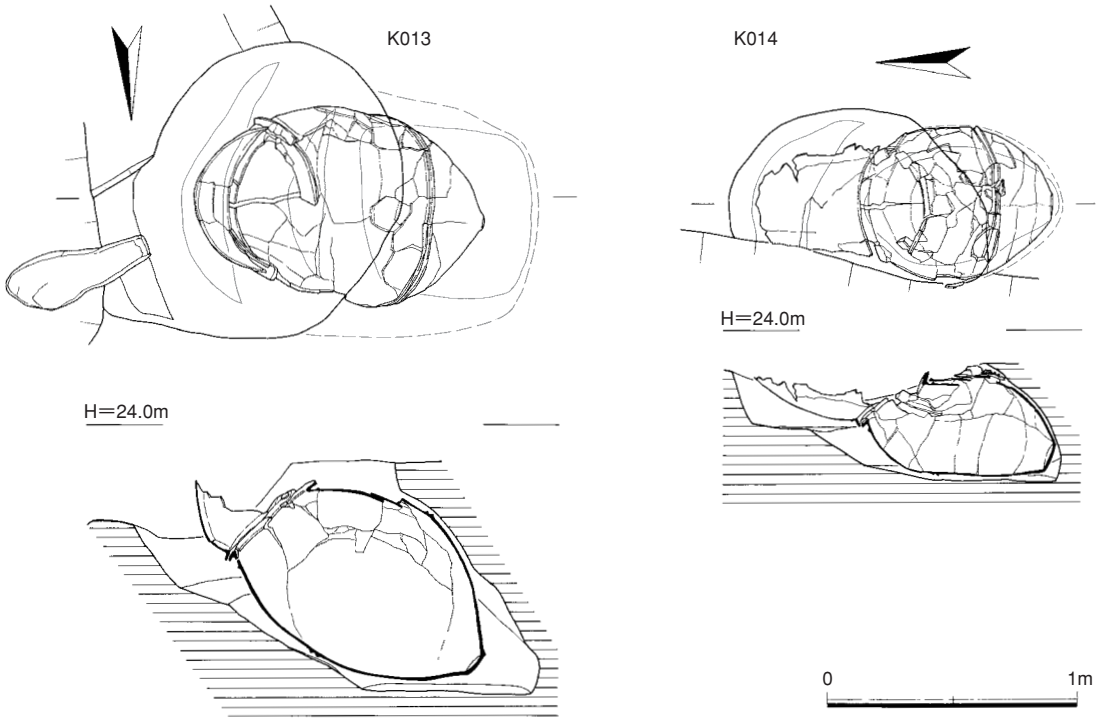
K009の南東側で検出した大形棺である。石棺墓011に掘り方の南側を削平されている。単棺で主軸方向はＮ ― 26°― Ｅにとり、埋置角度は35°である。墓坑は崩落により乱れているが本来上面は140cm ×90cm の隅丸長方形を呈するものと考えられ、検出面から底面までの深さは120cm である。掘り方は一段平坦面を有し、この部分で西側に大きく抉り込んでいる。北側は斜方向に掘り込み、底面は中央が僅かにくぼんでいる。

出土遺物（第14図　18）

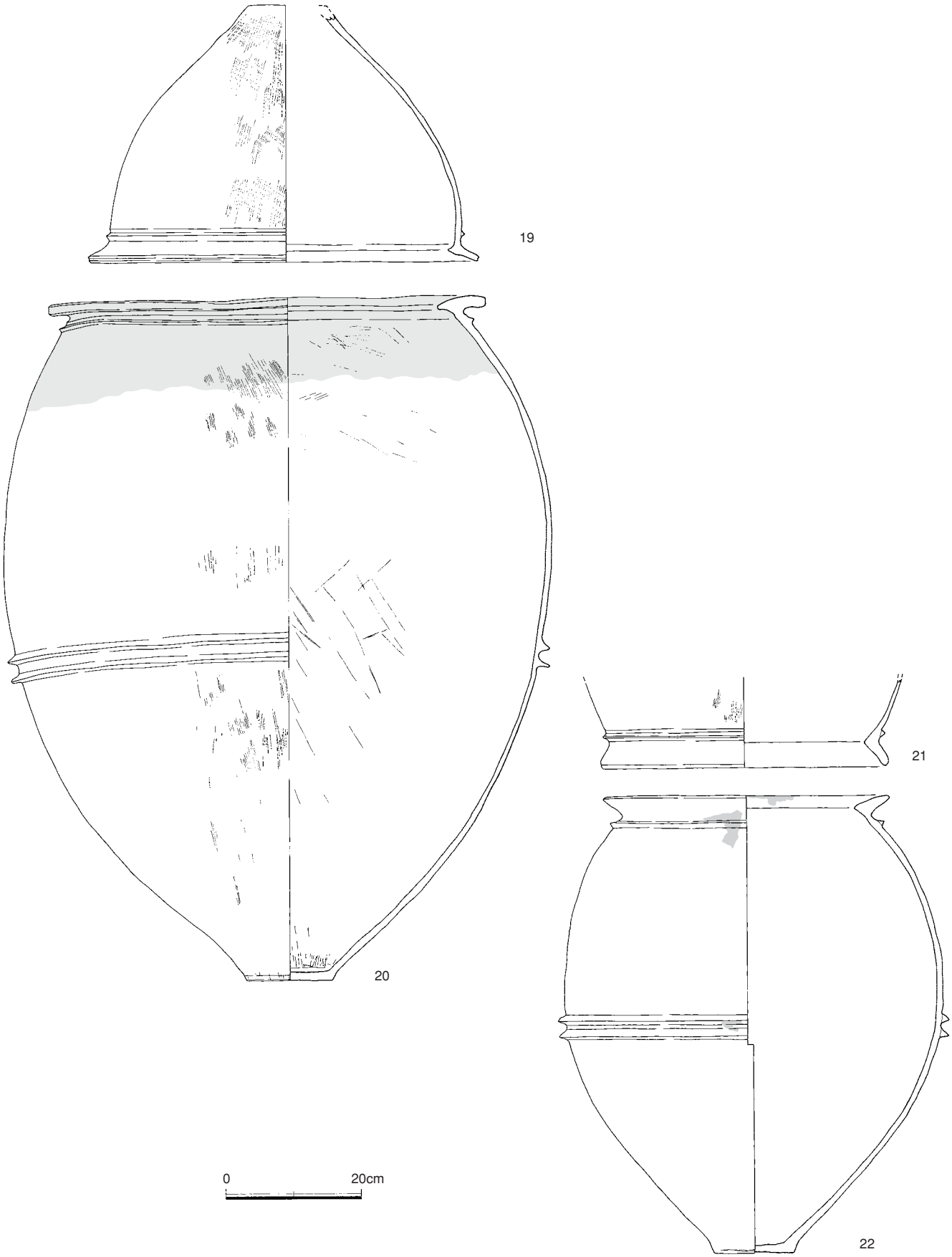
完形を呈する甕である。口縁部外径70.8cm、器高108.6cm、底径13.4cm を測る。胴部最大径は85.7cm で、突帯貼付位置の上方にある。口縁部は僅かに内傾している。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に２条の三角突帯を貼付する。内外面ナデ調整を行うが、胴部外面には部分的に縦刷毛が残っている。また内面のナデは丁寧で、板状工具の圧痕も認められる。口縁部外面裏側に僅かに黒塗りの痕跡と考えられる部分が認められるが、判然としない。淡黄色を呈し、焼成良好である。

K013（第15図）

調査区東側で検出した大形棺である。SK033に伴う石材が掘り方の上面に載っており、K013→SK033の先後関係となる。主軸方向はＮ―88°―Ｗにとり、埋置角度は38°である。上甕は削平によ



第15図　K013・014実測図（１／30）



第16図　K013・014出土遺物実測図（１／８）

り多くが失われている。検出面から底面までの深さは90cmを測り、掘り方は階段状に平坦面を有しながら棺体にそって斜方向に掘り込まれている。

出土遺物（第16図　19・20）

19は上甕に使用された鉢で、底部を欠く他はほぼ完存する。口径58cm、復元器高38cmを測る。口縁部は横ナデを行い、内傾している。突帯は口縁下に三角突帯１条を貼付する。胴部は外面縦刷毛を行い、ナデはほとんど行われていない。また内面は全体にナデ調整を行う。淡橙色を呈し、焼成は良好である。

20は完形の下甕である。口縁部外径64.8cm、器高101cm、底径12.8cmを測る。胴部最大径は81cmで、突帯貼付位置のやや上方にある。口縁部はやや内傾している。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に２条の突帯を貼付する。胴部外面は縦刷毛の後ナデを行うが、全体を丁寧にナデ消していない。また内面は板状工具による縦方向のナデ痕跡が明瞭に残り、底部付近には小口痕跡も認められる。口縁部から15～20cm幅で内外面に淡橙色の彩色を施している。塗布には幅4.5cm程度の刷毛状工具を用いたものと考えられる。彩色部以外の色調は淡黄色を呈し、焼成良好である。

K014（第15図）

調査区東側で検出した中形棺である。主軸方向はN―１°―Eにとり、埋置角度は26°である。上甕は削平により多くが失われている。掘り方平面は長さ１ｍの長円形を呈し、検出面から底面までの深さは45cmを測る。掘り方は北側に平坦面を有し、底面はほぼ平坦となる。

出土遺物（第16図　21・22）

21は上甕口縁部の破片である。復元口径は42cmを測る。口縁部は内湾し、頸部外面に三角形突帯を１条貼付する。調整は内外面ナデを行うが、外面には縦刷毛が残る。

22は約１／２残存している下甕である。復元口径41.5cm、器高67.8cm、底径11.6cmを測る。復元胴部最大径は55cmで、突帯貼付位置のやや上方にある。口縁部はやや内傾している。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に２条の長三角突帯を貼付する。内外面に丁寧なナデ調整を行い、外面底部付近に小口痕跡が残る。また外面に僅かながら黒塗りの痕跡が残っている。本来は外面全体に行われたものであろう。現状で器面は淡黄色～淡橙色を呈し、焼成良好である。

K015（第17図）

調査区南東側で検出した大形棺である。削平・撹乱により上甕・下甕共に大きく削平されている。主軸方向はN―83°―Wにとる。現状で掘り方は平面145×80cmの隅丸長方形を呈し、深さ15cm程度である。

出土遺物（第17図　23・24）

23・24はいずれも胴部の一部分のみが残存するものである。23は上甕である。１条のコ字突帯を有し、内面ナデ、外面縦刷毛による調整を行う。灰黄色を呈する。

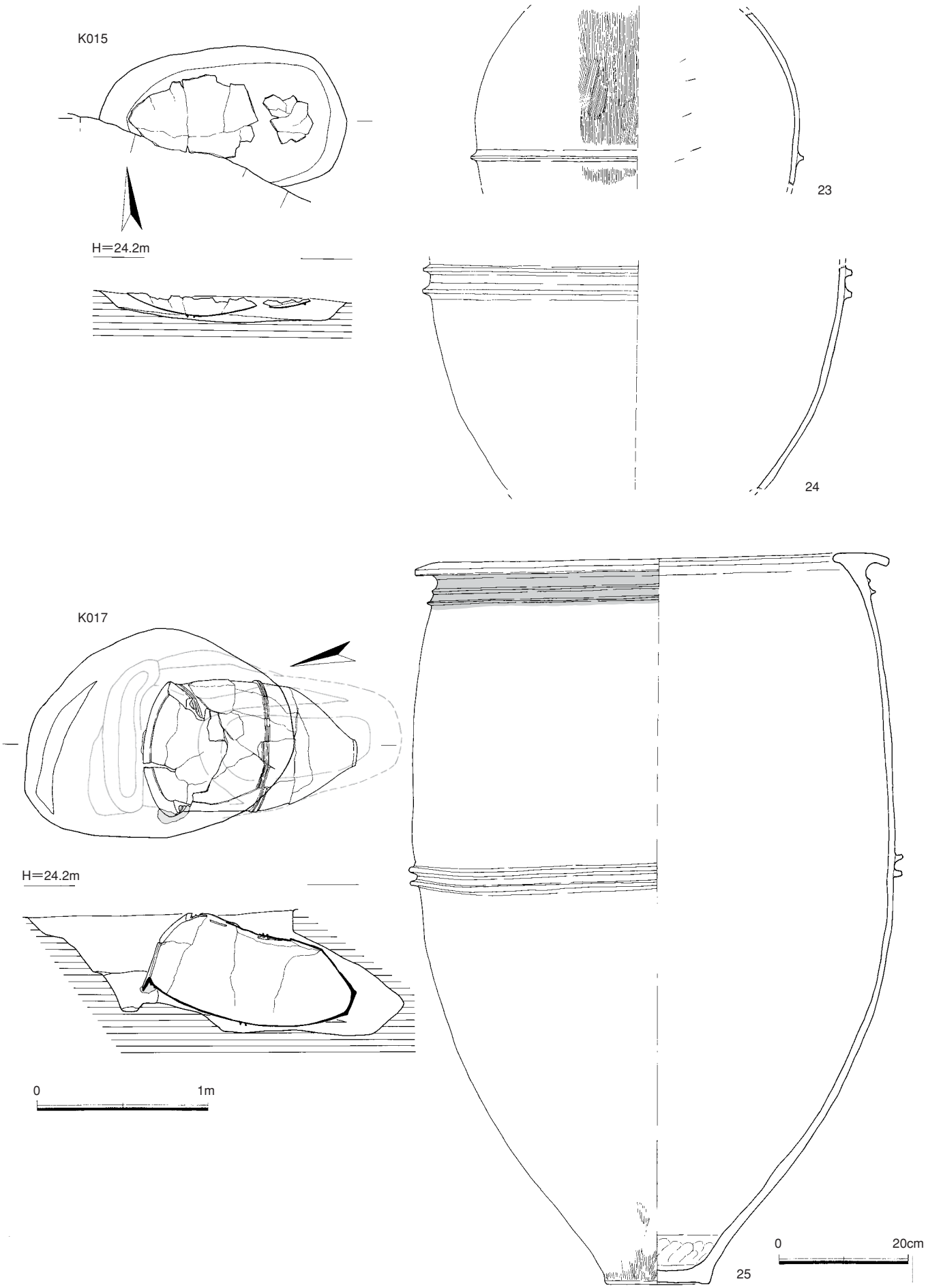
24は下甕である。２条のコ字突帯を有し、内外面ナデを行う。橙色を呈する。

K017（第17図）

調査区中央で検出した大形棺である。主軸方向はN―15°―Eにとり、埋置角度は21°である。単棺で、口縁部下の掘り方に残る溝状の掘り込みは木蓋をはめ込んだものと考えられる。口縁部外面には目張りの白色粘土が残っている。検出面から底面までの深さは70cmを測る。掘り方は北側を階段状に掘り込んでいる。

出土遺物（第17図　25）

全体の８割程度残存している。口縁部外径73.6cm、器高114cm、底径16cmを測る。砲弾形を呈し、



第17図　K015・017及び出土遺物実測図（1／30、1／8）

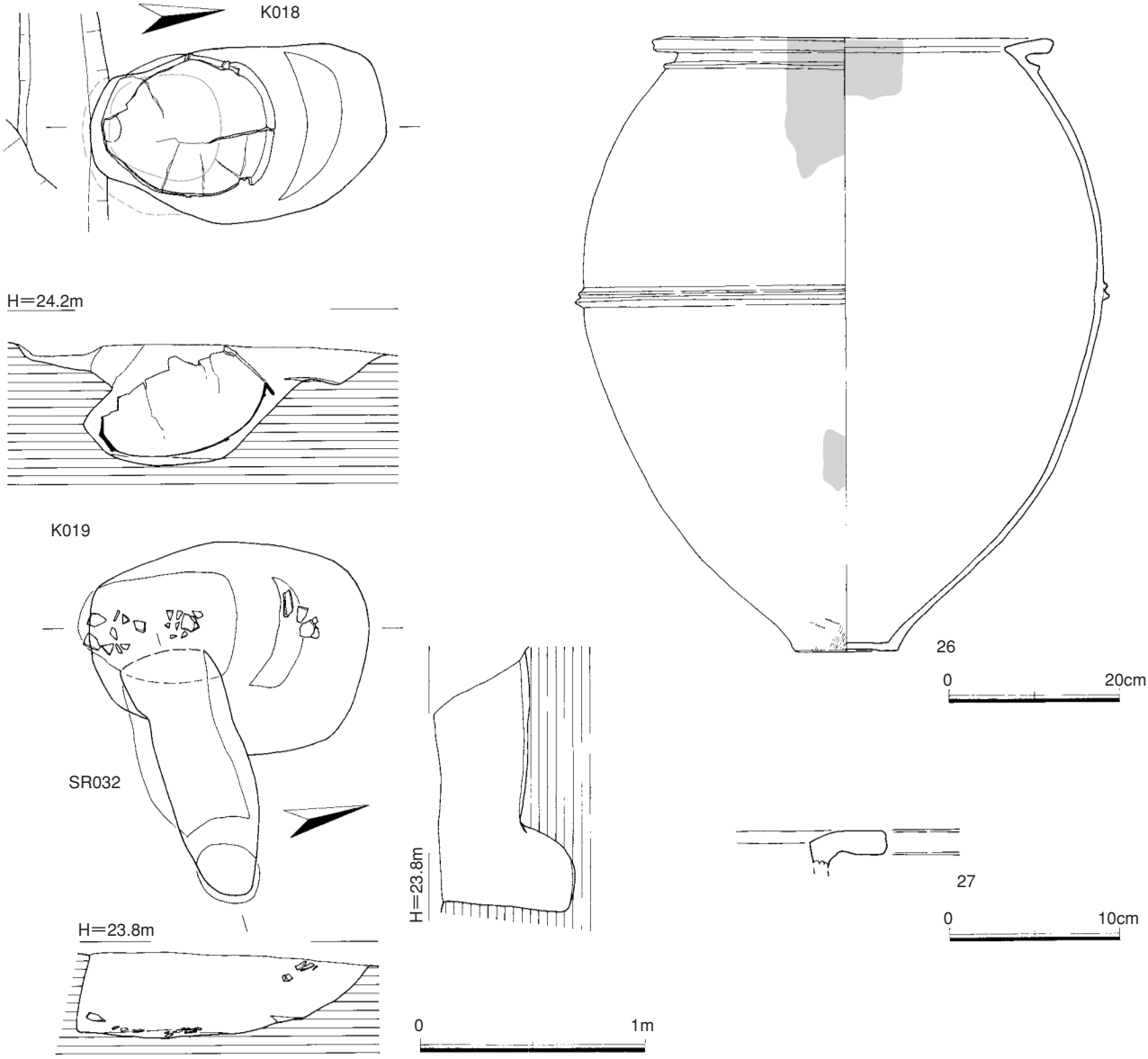
胴部最大径は75cm である。口縁部は内側に張り出しを有し、上面はほぼ平坦で外側が外傾している。突帯は口縁下に三角突帯２条、胴部中位に２条のコ字形突帯を貼付する。内外面は丁寧なナデ調整を行うが、外面底部付近にはナデ残した縦刷毛が認められる。口縁部外面～突帯間に黒塗りの痕跡が僅かに残っている。淡黄色～橙色を呈し、焼成良好である。

K018（第18図）

調査区西側で検出した大形棺である。主軸方向はN―６°―E にとり、埋置角度は35°である。単棺で、掘り方は一段平坦面を有し、以下は棺体に沿って斜方向に掘り込んでいる。検出面から底面までの深さは55cm を測る。

出土遺物（第18図　26）

26はほぼ完形の甕である。口径47cm、器高72.2cm、底径12.2cm を測る。胴部最大径は61.1cm で、胴部中位の突帯貼付位置にある。口縁部上面ははやや内傾している。突帯は口縁下に三角形突帯１条、胴部中位に１条のＭ字形突帯を貼付する。内外面には丁寧なナデ調整を行い、底部付近にはけし残



第18図　K018・019・SR032及び出土遺物実測図（１／30、27は１／４、26は１／８）

した縦刷毛が残っている。口縁部内面～口縁部上面と胴部の一部に黒色顔料の塗布が認められ、本来は口縁部内面から外面全体に黒塗りが行われたものと考えられる。現状の器表面は淡橙色を呈し、焼成良好である。

K019（第18図）

調査区東側で検出した。125×95cmの土坑内に甕棺の小破片が散乱していた。土坑墓032と切り合っており、土坑墓構築の際に破壊された可能性を考えて、甕棺墓として報告しておく。掘り方の形状は北側に平坦面を有することや、南側の底部が抉り込むこと等、甕棺挿入時の掘り方が痕跡的にではあるが残されているものと考えられる。

出土遺物（第18図　27）

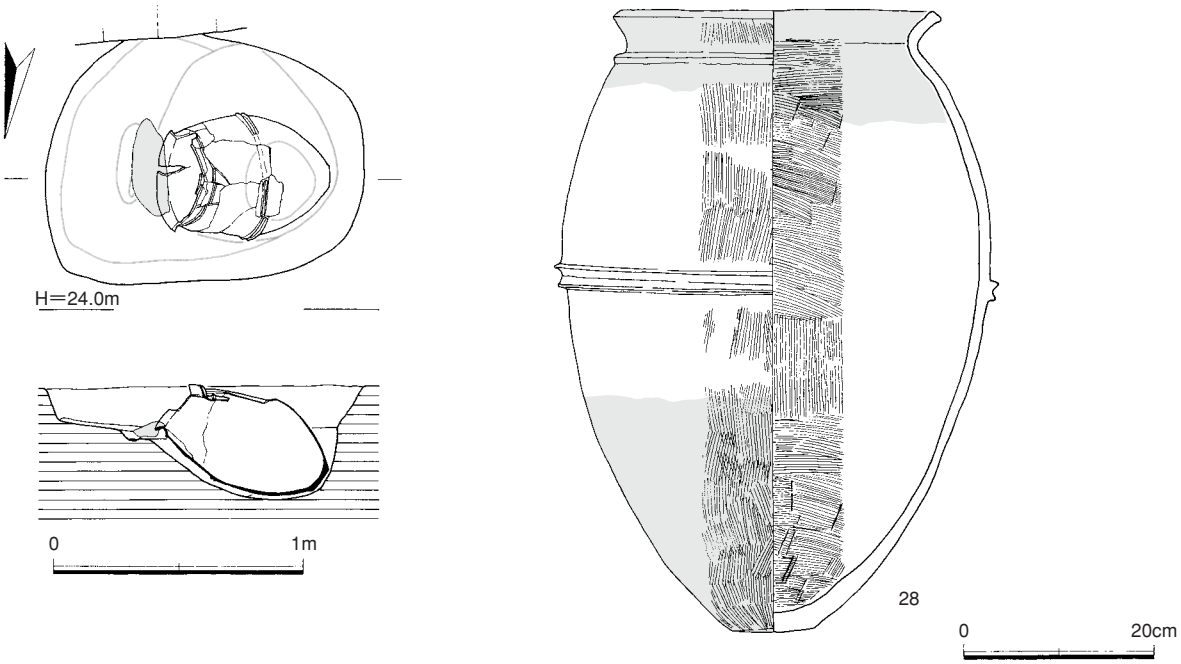
出土遺物はいずれも小破片のみで図化できた遺物は１点のみである。27は上甕として取り上げた口縁部破片である。小破片で口径の復元はできていない。屈曲は逆Ｌ字状を呈し、口縁部上端面は水平である。

K020（第19図）

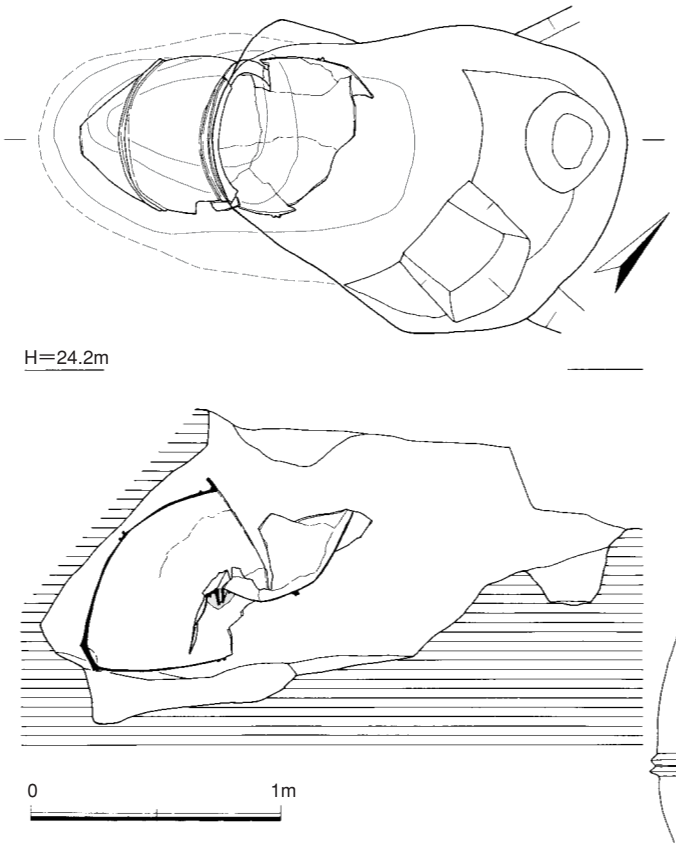
調査区東側で検出した単棺の中形棺である。切り合い関係より土坑墓028より後出する。主軸方向はＮ―81°―Ｅにとり、埋置角度は27°である。検出面から底面までの深さは45cmを測る。掘り方は東側に平坦面を有し、以下は斜方向に掘り込むが、甕口縁部下に溝状の掘り込みが残る。またこの部分から甕口縁部内面にかけて白色粘土が残るが、これは口縁部全体に施されていない。

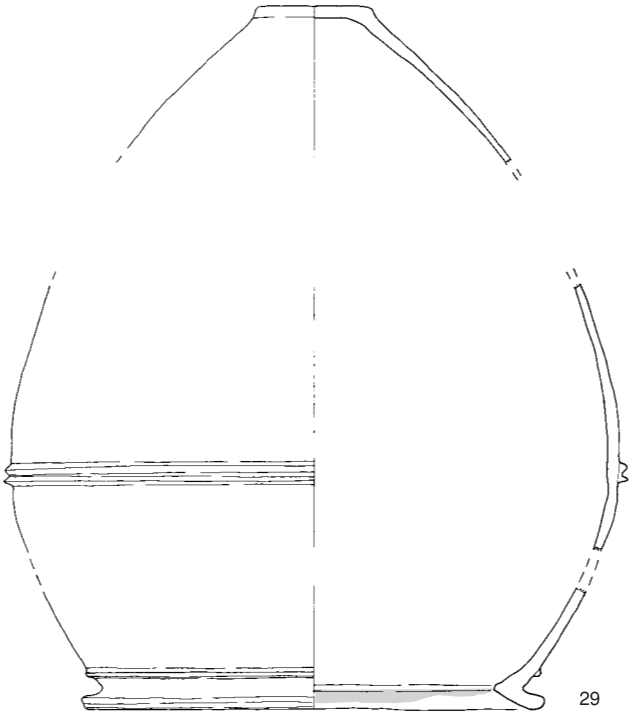
出土遺物（第19図　28）

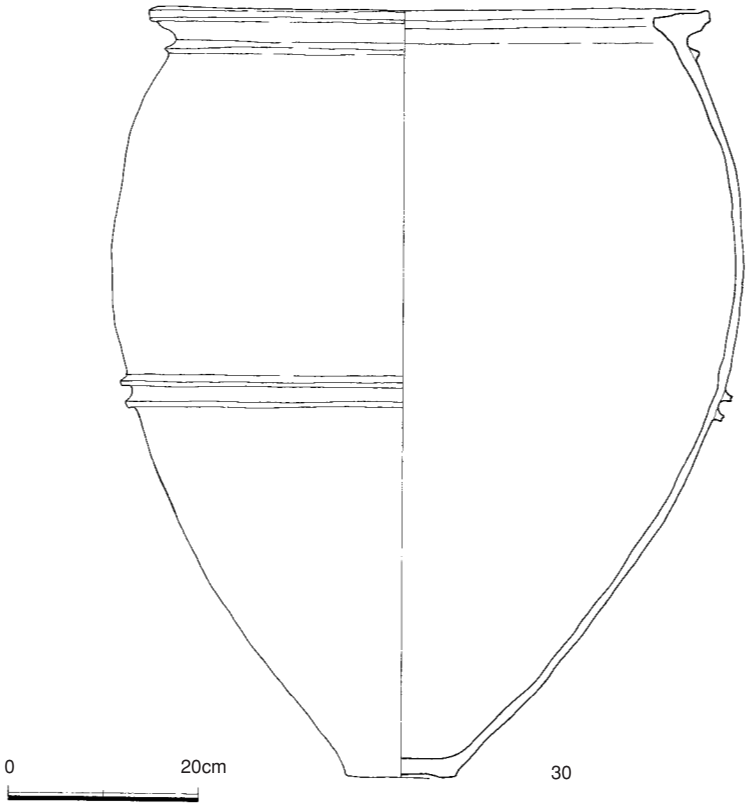
ほぼ完形を呈する。口径32.8cm、器高65.6cm、底径９cmを測る。胴部最大径は45cmで、突帯貼付位置にある。口縁部はく字状に外反し、端面は四角く仕上げている。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に１条の幅広のＭ字形突帯を貼付する。調整は内面横刷毛、外面縦刷毛を行い、ナデ調整はほとんど行われていない。底部は僅かにレンズ状を呈する。口縁部内面～頚部外面と、底部～胴部下半が化粧土状の明橙色を呈する。また間の胴部上半～中位は浅黄橙色である。



第19図　K020及び出土遺物実測図（１／30、１／８）







第20図　K022及び出土遺物実測図（１／30、１／８）

K022（第20図）

調査区西側で検出した接口式の大形棺である。土坑墓023に掘り方の一部を切られている。主軸方向はN―49°―Eにとり、埋置角度は34°である。撹乱坑により上甕の多くが破壊されているが、一部に下甕との白色粘土目張りが残っている。検出面から底面までの深さは120cmを測る。掘り方は北東側から階段状に掘削されている。また底面は一度20cm程掘り下げたものを、甕棺挿入の都合からであろうか、掘削したロームによって再度埋め戻されている。

出土遺物（第20図　29・30）

29は胴部下半を部分的に欠く上甕である。復元口径46.4cm、底径12cm、胴部最大径63.8cmを測る。口縁部はやや内傾している。突帯は口縁下にコ字形突帯１条、胴部中位に１条のM字形突帯を貼付する。内外面ナデ調整を行う。口縁部上端面に黒色顔料を塗布した痕跡が認められるが、胴部については不明である。

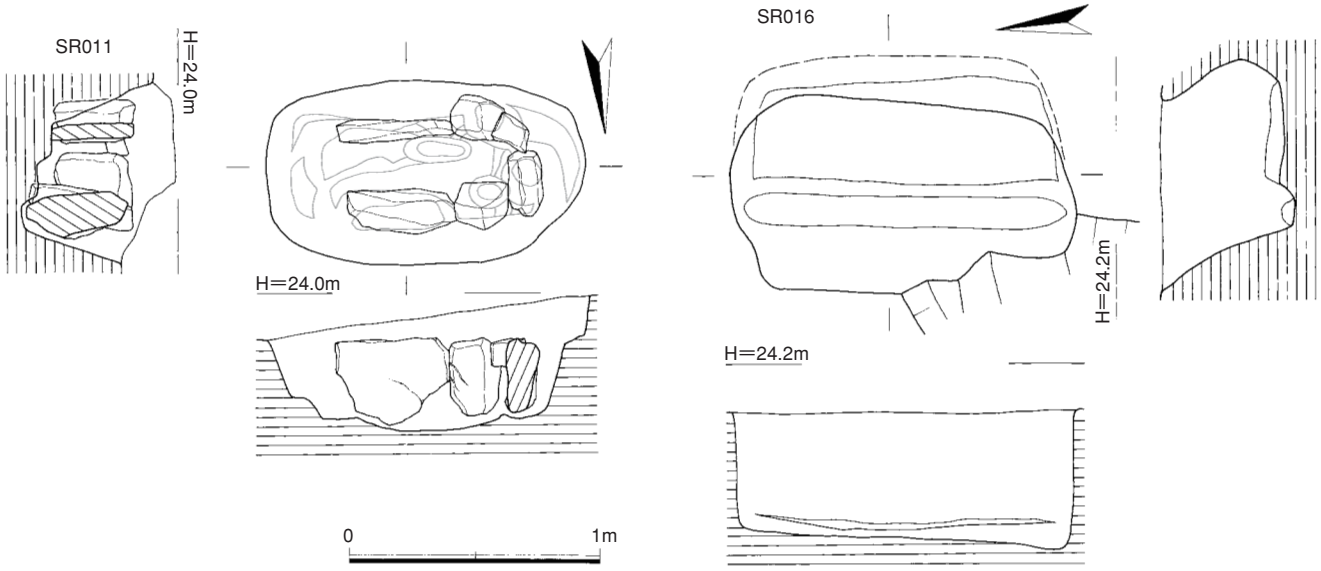
30はほぼ完形を呈する下甕である。口径58.6cm、器高81.2cm、底径11.3cmを測る。胴部最大径は66.6cmで、突帯貼付位置のやや上方にある。口縁部はほぼ水平である。突帯は口縁下に三角突帯１条、胴部中位に２条のコ字形突帯を貼付する。内外面は丁寧なナデ調整を行う。明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

２）土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓（SR）

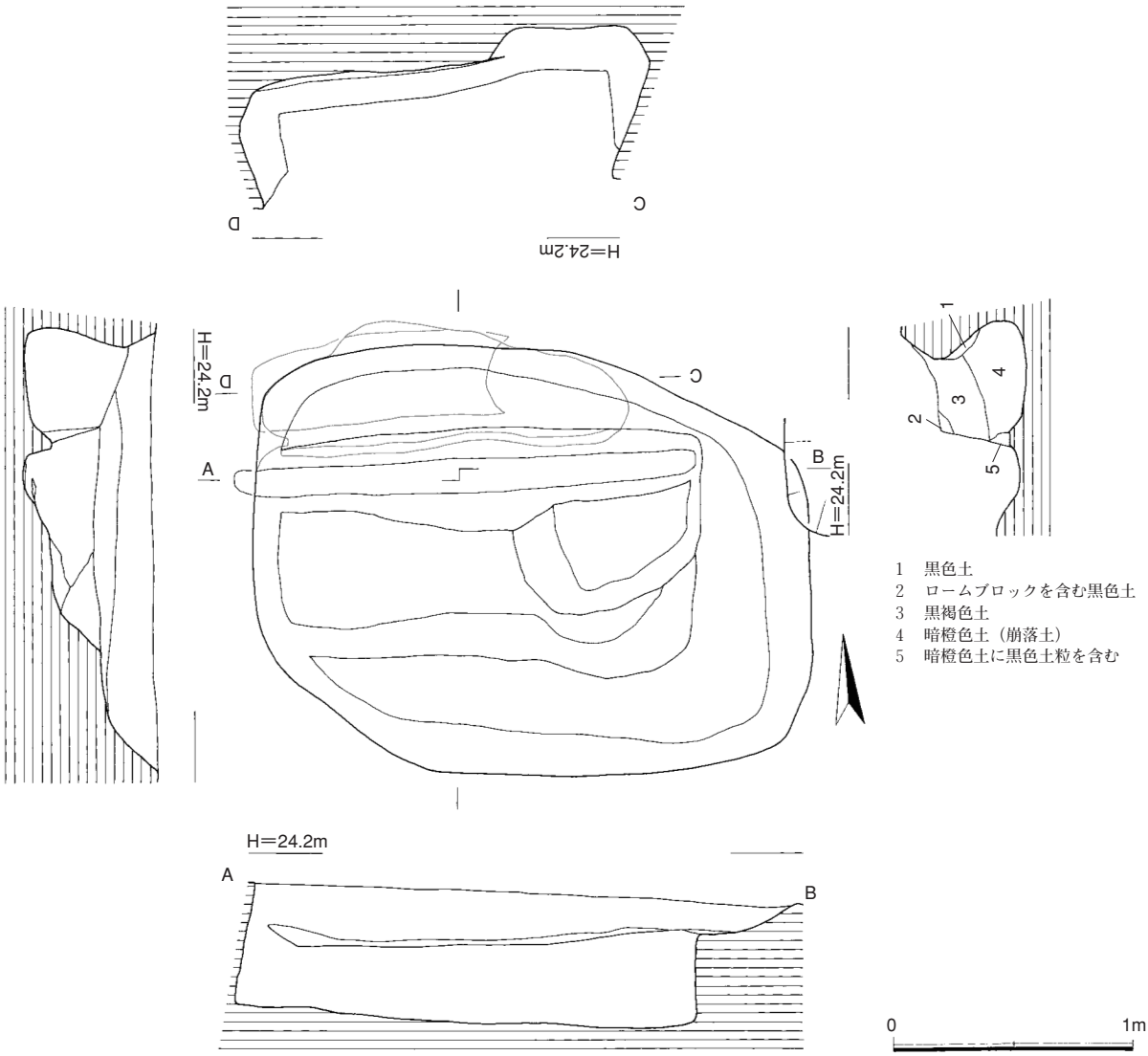
土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓はそれぞれ17基・２基・２基を検出している。埋葬部分形状は小口部の一方に斜坑を有するものが主体となる。赤色顔料の出土状況などから斜坑部分が遺体の足元に当たるものと考えられる。出土遺物はほとんどなく時期決定は困難であるが、基本的な切り合い関係は甕棺墓→土坑墓→石棺墓となっているが、K020のように土坑墓を切る新出の甕棺墓も存在している。

SR011（第21図）

調査区東側で検出した石棺墓である。K012とSR021を切っている。主軸方向はN―85°―Wにとる。墓坑掘り方は125×70cmの隅丸長方形を呈し、検出面から底面までの深さは50cmを測る。石材は東小口部を試掘時に失っているが、他は原位置を保っている。石材は花崗岩の自然石を使用し、両側壁



第21図　SR011・016実測図（１／30）



第22図　SR021実測図（１／30）

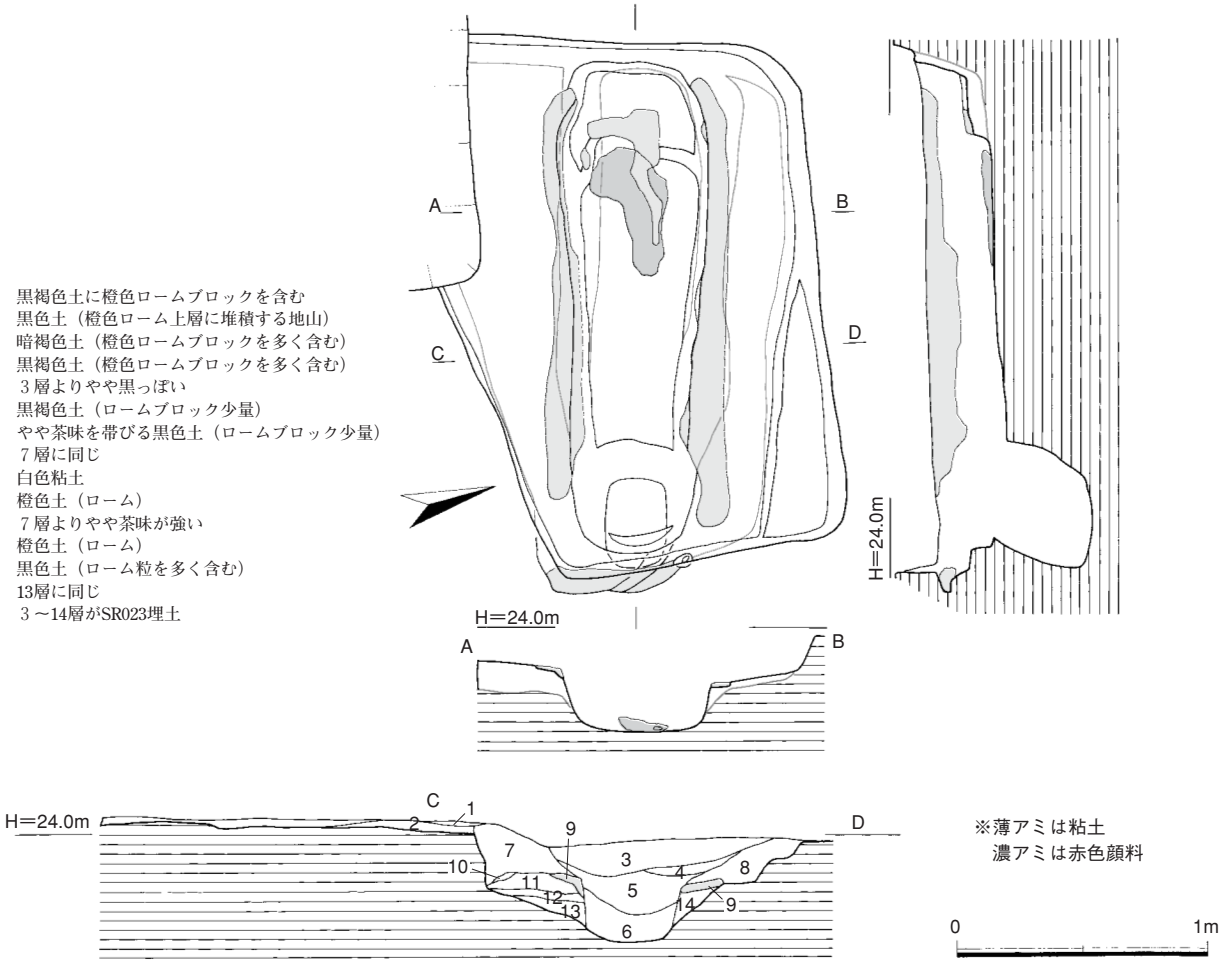
に板石状の石材を使うほかは、高さ40cm、幅20cm 前後の縦長の石材を立てて使用している。棺身の内法は70×20cm を測る。また現状では天井部分には石材は認められない。

SR016（第21図）

調査区西側で検出した土坑墓である。主軸方向はＮ―５°―Ｅにとる。平面135×75cm、検出面からの深さ50cm を測る。掘り方は東壁が抉り込み、底面には115×40cm の平坦面を作り出している。またこの平坦面の西側には幅10cm、深さ５～10cm を測る溝状の掘り込みを有する。土層では確認できなかったが、木質の側板が据えられていた可能性が考えられる。

SR021（第22図）

調査区中央部で検出した土坑墓である。主軸方向はＮ―85°―Ｗにとる。墓坑平面230×175cm を測る大型の掘り方を有する。棺身本体は北壁を抉り込むようにして掘削されている。棺身底面は150×40cm を測り、このうち北側は10cm 程更に掘り窪められている。棺身の南側には幅15cm を測る溝状の掘り込みを有する。土層では確認できなかったが、上述の SR016同様の機能を有するものと考えられる。



第23図　SR023実測図（１／30）

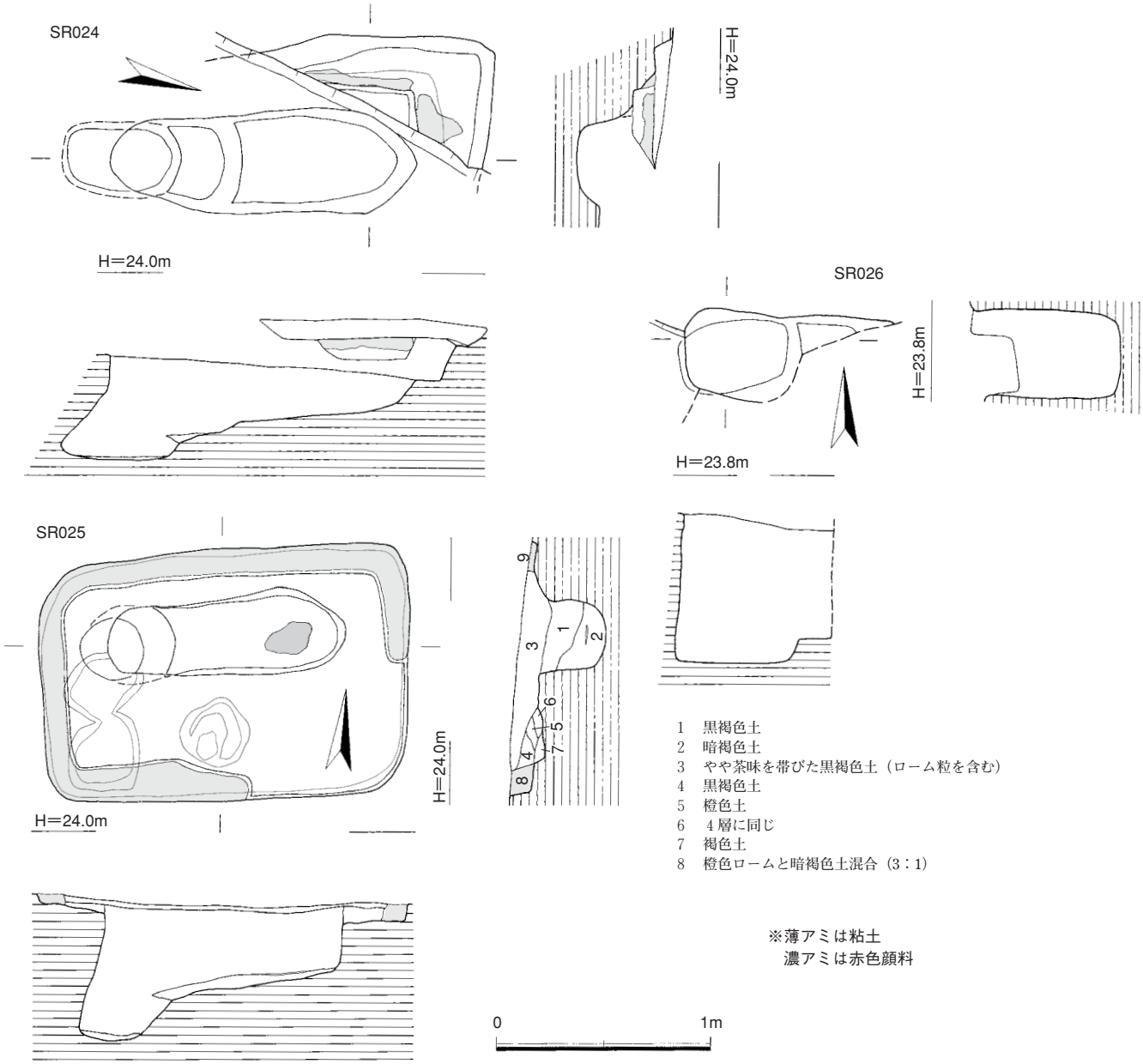
SR023（第23図）

調査区中央部で検出した土坑墓である。主軸方向はＮ―76°―Ｗにとる。墓坑平面は西側短辺が150cm＋α、東側短辺が120cm、長辺205cmを測る歪な隅丸長方形を呈する。10～20cm下げたところで、棺身と白色粘土を検出した。棺身本体は平面190×50cmを測り、西側先端が一段高くなり、東側足元に斜めに深さ30cm程の掘り込みが行われる。また木蓋の固定に用いられたと考えられる白色粘土は棺身の長軸方向に沿って貼り付けられたものと、短軸方向は足元側には掘り方を抉り込んだ内部に充填させる部分と、頭位側は棺底部分に帯状に広がっている。なお頭位側の粘土については木蓋の崩壊に伴って落ち込んだ可能性が考えられる。棺底には西側に水銀朱が広がっておりこのことからも、この部分が頭位側に当たることが推定できる。

SR024（第24図）

調査区東側で検出した土坑墓である。主軸方向はN―15°―Wにとる。試掘時に墓坑の大半を掘り下げており、北西コーナー部分のみが残存している。検出面での埋土はローム粒混じりの黒褐色土である。本来長方形を呈していたと一段（10cm程度）掘り下げた所で、目張りの青白色粘土を確認している。この帯状の粘土内側は更に一段（10cm）掘り下げられた後に、棺身部分を掘削している。棺身は平面140×45cmを測り、南半部分は底面を階段状に壁面を抉り込んで掘り下げている。

SR025（第24図）



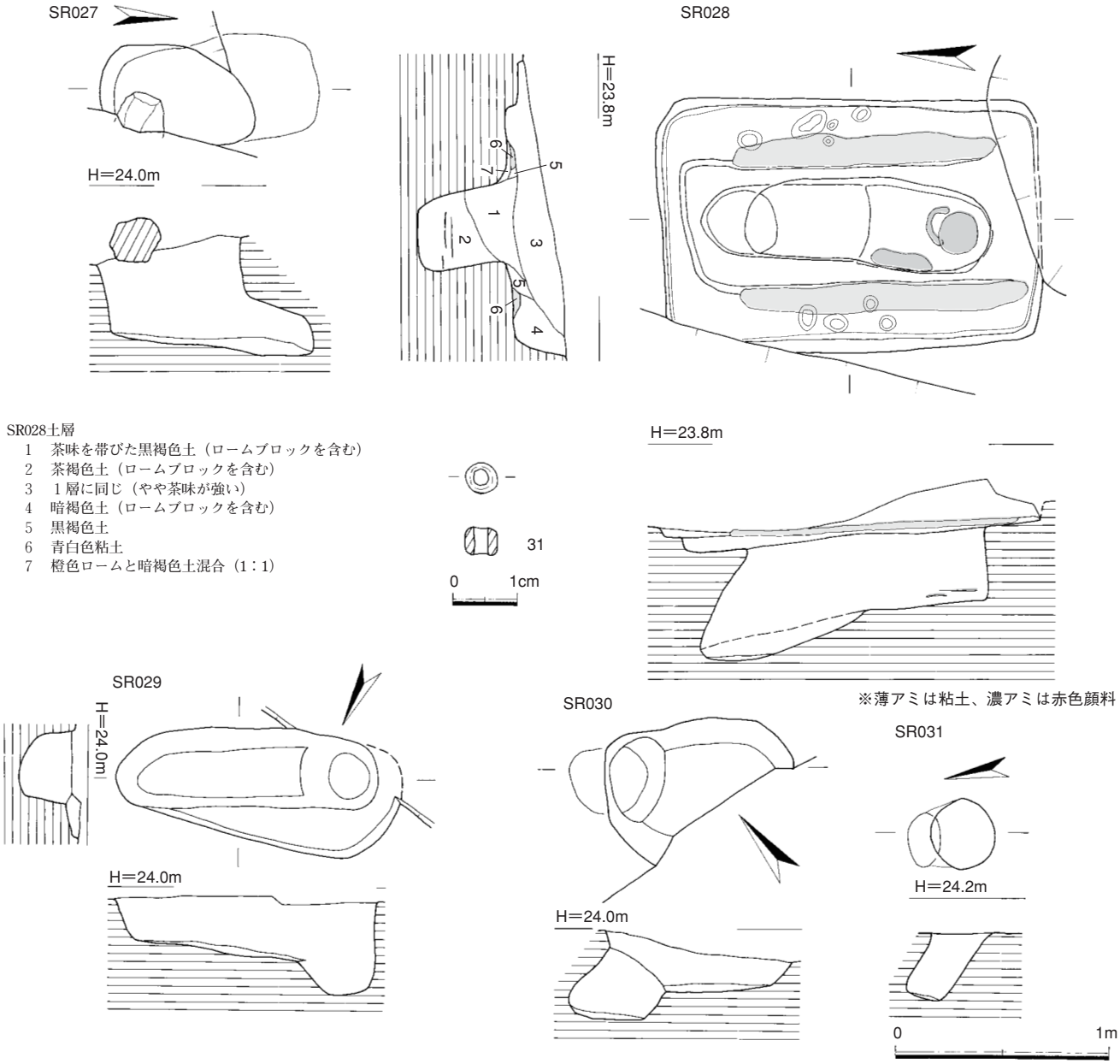
第24図　SR024・025・026実測図（1／30）

調査区東側で検出した土坑墓である。主軸方向はN―84°―Eにとる。墓坑平面170×115cmを測る。検出面上面で墓坑掘り方内側に幅10cm強の粘土層（8層）が3／4周で確認できる。棺身は掘り方の中央からやや北側に掘削されている。110×35cmを測り、東側底面に水銀朱の広がりが認められ、こちらが頭位と考えられる。また西端部分は足元に斜坑を掘り込んでいる。

SR026（第24図）

調査区南東端部で検出した土坑墓である。主軸方向はN―89°―Wにとる。SD064との先後関係は不明であるが、SD026掘削途中に粘土を確認しておらず、方形墓坑より棺身部分を掘り下げ、木蓋を有する形式のものであれば、SD064に先行する土坑墓である可能性が高い。検出しているのは棺身の足元掘り込み部分付近のみである。

SR027（第25図）



第25図　SR027・028・029・030・031及びSR028出土遺物実測図（１／30、１／１）

調査区南東端部で検出した土坑墓である。主軸方向はN―３°―Wにとる。平面75×50cmを測り、北側が壁面を30cm程抉り込んで掘削されている。底面は北側が緩やかに低くなっているが、他の足元掘り込みのよな明瞭なものではない。埋土はローム小粒を含む黒灰色土である。また検出面南側に花崗岩礫が据え置かれている。

SR028（第25図）

調査区東側で検出した土坑墓である。主軸方向はN―３°―Wにとる。墓坑平面175×125cmを測り、一段掘り下げたところで幅55cmの長方形に更に段がついている。青白色粘土はこの長方形の掘り方の両長側辺に沿って貼り付けられている。なおこの青白色粘土中から小玉が１点出土している。棺身本体もこの内部から掘り下げられている。平面規模115×40cmを測り、北側半分は足元の斜坑が掘り込まれている。また南半部には３箇所に水銀朱が残っている。

出土遺物（第25図　31）　コバルトブルーを呈するガラス製の小玉である。外径４ mm、孔径２mm、高さ４ mm を測る。粘土中より１個のみ出土している。

SR029（第25図）

調査区西側で検出した土坑墓である。主軸方向は N―64°―E にとる。北側を一段掘り下げたところで棺身が検出できる。埋土はローム粒を含む黒褐色土である。棺身部の平面規模120×36cm を測り、東側に深さ15cm の足元斜坑が掘り込まれている。

SR030（第25図）

調査区南端部で検出した土坑墓である。主軸方向はN―49°―Wにとる。復元すると平面はおおよそ90×70cm を測り、北西側に足元の斜坑が掘り込まれている。また平面的には SD063に先行する遺構と考えられる。埋土はロームブロック混じりのしまりの無い褐色土で他の土坑墓と異なるが、形状等から一連の土坑墓の一つと考えておきたい。

SR031（第25図）

調査区東側で検出している。土坑墓の足元斜坑部分のみが残存したものと考えられるため本項で報告する。主軸方向はおおよそ N―11°―E にとる。埋土は黒色土で深さは30cm を測る。

SR032（第18図）

調査区東側で検出した土坑墓である。主軸方向は N―86°―E にとる。調査時には切り合い関係が不明瞭なまま掘り下げていたが、他の切り合い関係や K019内の遺物残存状態から、甕棺墓の抜き取り坑と考えられる K019を切るものと考えられる。平面120×45cm を測り、東側に足元掘り込みを有する。

SR033（第26図）

調査区東端で検出した土坑墓である。主軸方向は N―78°―E にとる。南側を調査区外に延ばすため全体は明らかでないが、平面115＋α×35cm を測る隅丸長方形の掘り方を呈する。調査区内では足元の掘り込みは確認できていない。埋土はローム粒混じりの黒褐色土である。また掘り方北側端部に花崗岩自然礫が据えられており、この土坑墓に関連するものと考えられる。

SR034（第26図）

SR033の東側に隣接して検出した土坑墓である。主軸方向は N―62°―E にとる。SR033に伴うと考えられる石材が掘り方の上面に載っているため、SR034→ SR033の先後関係となると考えられる。墓坑の北側の一部しか確認していないため形状は不明瞭であるが、西側の平坦面から底面にかけての斜面に沿って白色粘土が施されている。この粘土は木蓋の目張りと考えられ、棺身本体はこの平坦面から更に掘り込まれているものと考えられる。埋土は SR033と同じローム粒混じりの黒褐色土である。

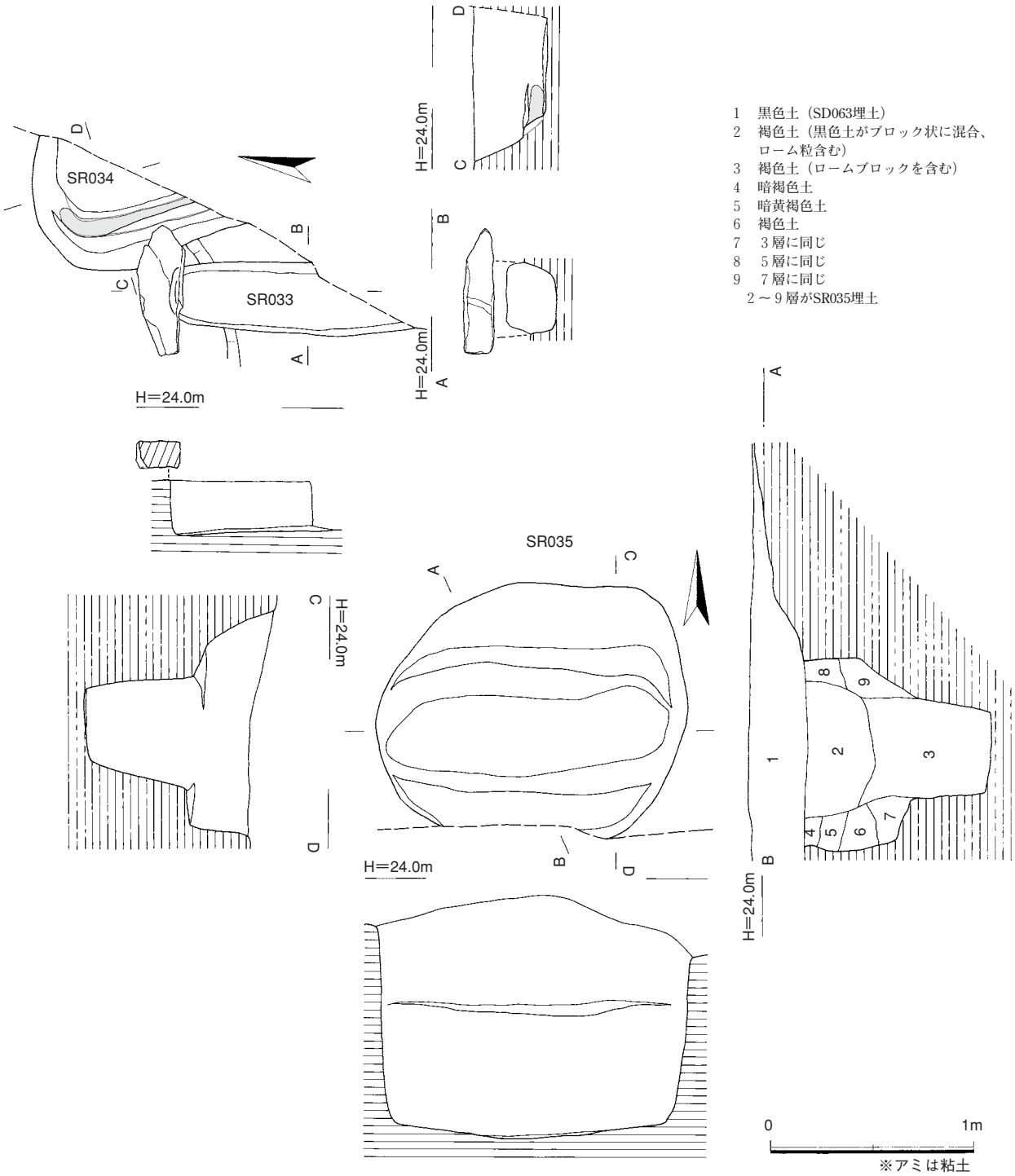
SR035（第26図）

調査区南端部で検出した土坑墓である。主軸方向は N―90°―E の東西方向にとる。一部調査区外になるがおおよそ平面は150×125cm の歪な隅丸長方形を呈する。南北両長側辺に平坦面を有し、底面にほぼ真直ぐに掘り下げている。土層観察から SD063に切られる土坑墓と考えられる。

SR036（第27図）

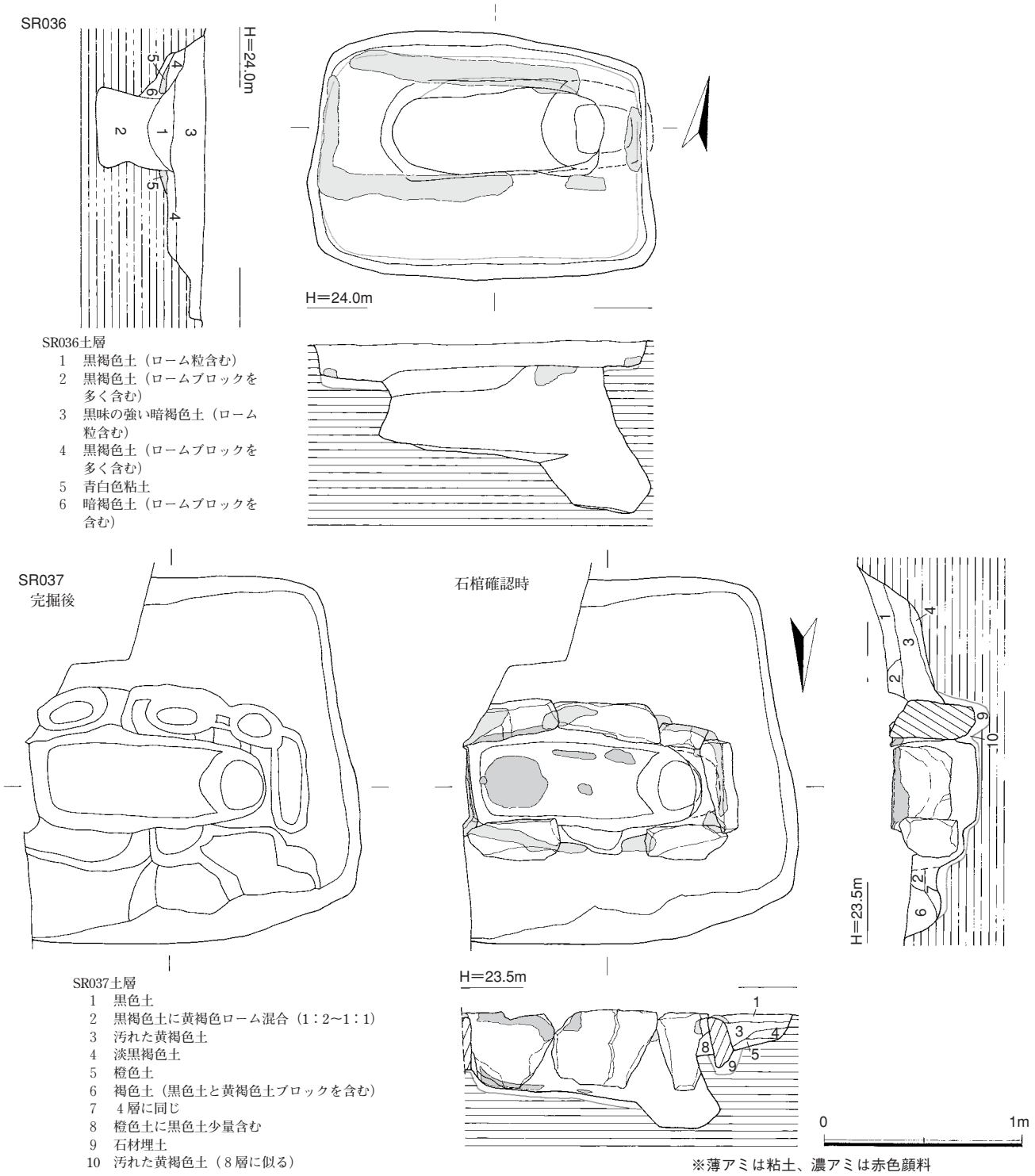
調査区中央部分で検出した土坑墓である。SD067を切って確認している。主軸方向はN―80°―Eにとる。墓坑平面165×120cm を測り、一段掘り下げたところで長方形に巡る木蓋目張り青白色粘土を検出する。粘土確認面で棺身本体も検出している。平面規模105×40cm を測り、壁面は全体に抉り込んでいる。西側底面には足元の斜坑が掘り込まれている。

SR037（第27図）



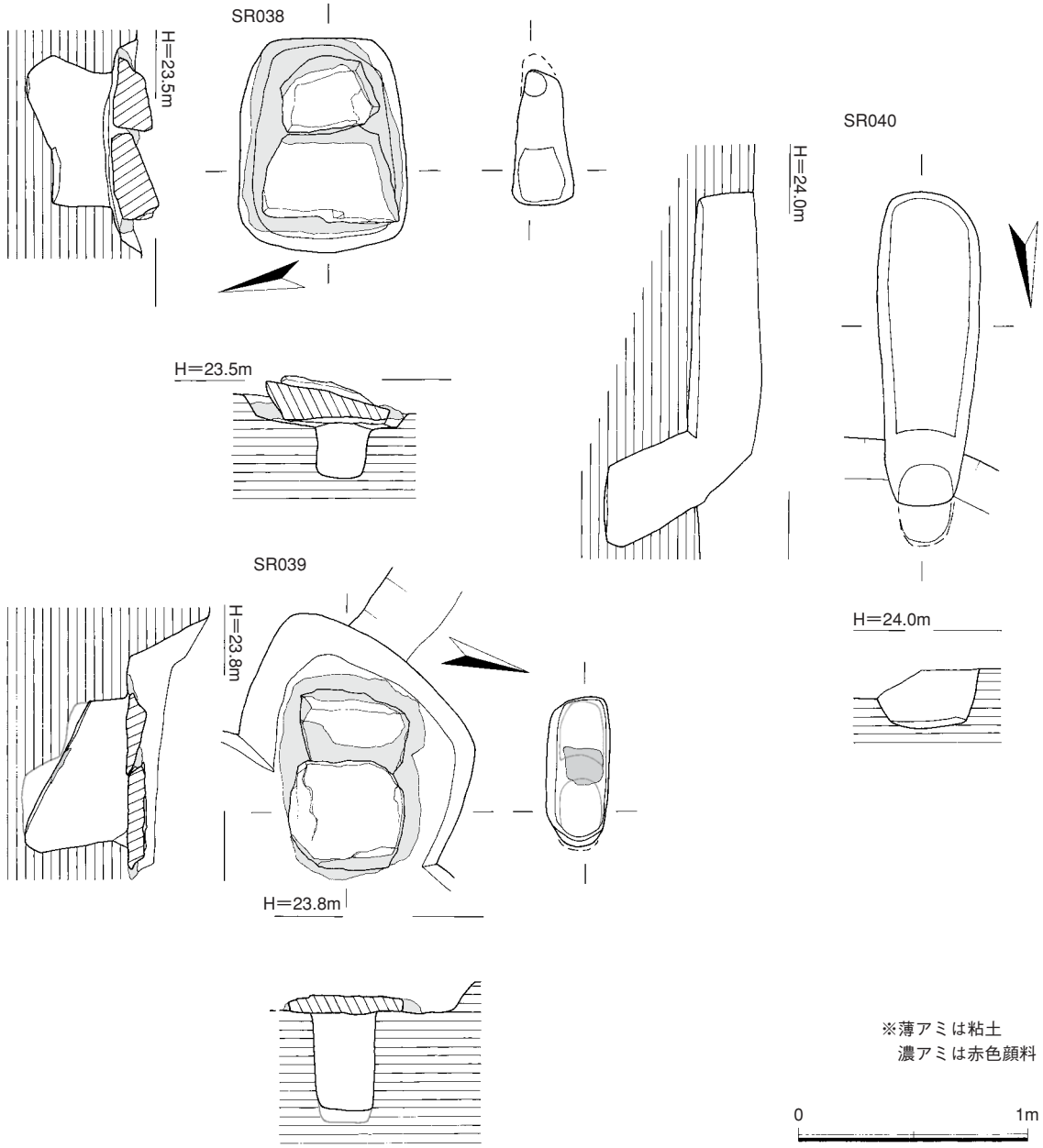
第26図　SR033・034・035実測図（1／30）

調査区東端部で検出した石棺墓である。SD067を切って構築されている。主軸方向はN―88°―Wにとり、石棺墓SR038に並行して構築されている。東側が調査区外に延びるため不明瞭な点もあるが、墓坑掘り方は東西180cm、南北は200cm強のほぼ方形に近い掘り方が復元できる。埋葬部は中心からやや北側によって構築されている。基本的に板状の花崗岩礫を使用し、小口部各1石、両側辺部各3石の計8石によって作られている。なお遺構面が耕作土直下にあたることや石棺内にしまりの無い黒



第27図　SR036・037実測図（1／30）

色土と共に粘土ブロックが多く混入していることから、北側の側辺中央石及び天井石は後世の水田使用時に取り上げられたものと考えられる。青灰色粘土は石材の上面を中心に確認されており、天井との目張りに用いられたものと考えられる。また棺体内部は西側小口部分に足元掘り込みを有している。更に底面東側を中心とした平坦面及び東側の石材側面上部に水銀朱が確認された。特に石材に塗布された状況から頭位部分を特に意識した状況を窺うことができる。



第28図　SR038・039・040実測図（１／30）

SR038（第28図）

調査区東端部で検出した石蓋土坑墓である。SD067を切って構築されている。主軸方向はN―78°―Wにとり、石棺墓SR037に並行して構築されている。板状の花崗岩自然礫を２石用いて蓋としており、周囲及び石材の継ぎ目を粘土で目張りしている。墓坑平面は92×72cmの隅丸長方形を呈する。蓋を除去すると棺身部が確認できる。現状でも一部空洞化しており、黒色土が自然流入しているのみである。棺身部は57×25cmを測り、東側に斜坑を有する。

SR039（第28図）

調査区中央部で検出した石蓋土坑墓である。SD067を切って構築されている。主軸方向はN―75°― Eにとる。50cm角の板状の花崗岩自然礫を２石用いて蓋としており、周囲及び石材の継ぎ目を粘土で目張りしている。試掘により墓坑の一部を破損するが、墓坑は埋葬主軸からやや歪んだ方向に掘

削されている。蓋を除去すると棺身部が確認できる。棺身部分は当初平坦面を有した掘り方が行われているが、底面にロームと黒色土混合土による貼り床状の盛り土が行われている。この面に散漫であるが径15cmの範囲内に水銀朱の分布が認められた。このことから埋葬時には貼り床上面の西から東に傾斜した底面を使用したものと考えられる。なお貼り床面より上層にはロームブロック混じりの黒褐色土が堆積している。

SR040（第28図）

調査区中央部で検出した土坑墓である。主軸方向はN―５°―Eにとる。復元すると平面はおおよそ135×45cmを測り、北側に深さ40cmの足元斜坑が掘り込まれている。また掘り方幅は北側の足元方向に向かってやや狭くなっている。埋土はローム粒を含む黒褐色土である。

３）土坑

SK061（第29図）

K006→SK061となる土坑である。平面は径1.1～1.2mの円形を呈する。30cm程掘り下げると、以下は平坦面を有して75×40cmの長方形の掘り込みを有する。埋土は平坦面までがしまりのない黒色土、長方形掘り方内がローム粒を含んだ黒色土である。古墳時代後期～古代の土坑であろう。

出土遺物（第29図　32）　底面付近で出土した土師器甕である。内面には縦方向のヘラ削りが行われ、径部の稜線は明瞭となる。胎土には径２～３ mmの石英砂粒を多く含んでいる。

SK062（第29図）

SK062→K004となる土坑である。平面1.7×1.4mのやや歪な長方形を呈する。東西両壁の南側には対になるように壁面に抉り込みを有する。底面は１×0.7mの長方形を呈し、中央に径25cm、深さ30cmの掘り込みがある。現状でこの掘り込み中途で湧水が始まる。出土遺物はなく形状から落とし穴状の遺構と考えられるが、本地点内ではこれに類する遺構は他にない。

SK066（第29図）

調査区南西隅で確認した溝状の土坑である。SR016との切り合い関係については明らかでない。掘り方は北側が深くなる階段状を呈する。また埋土はローム粒を含む黒色土である。出土遺物は弥生土器片２点のみで、１点は丹塗り土器である。

４）溝

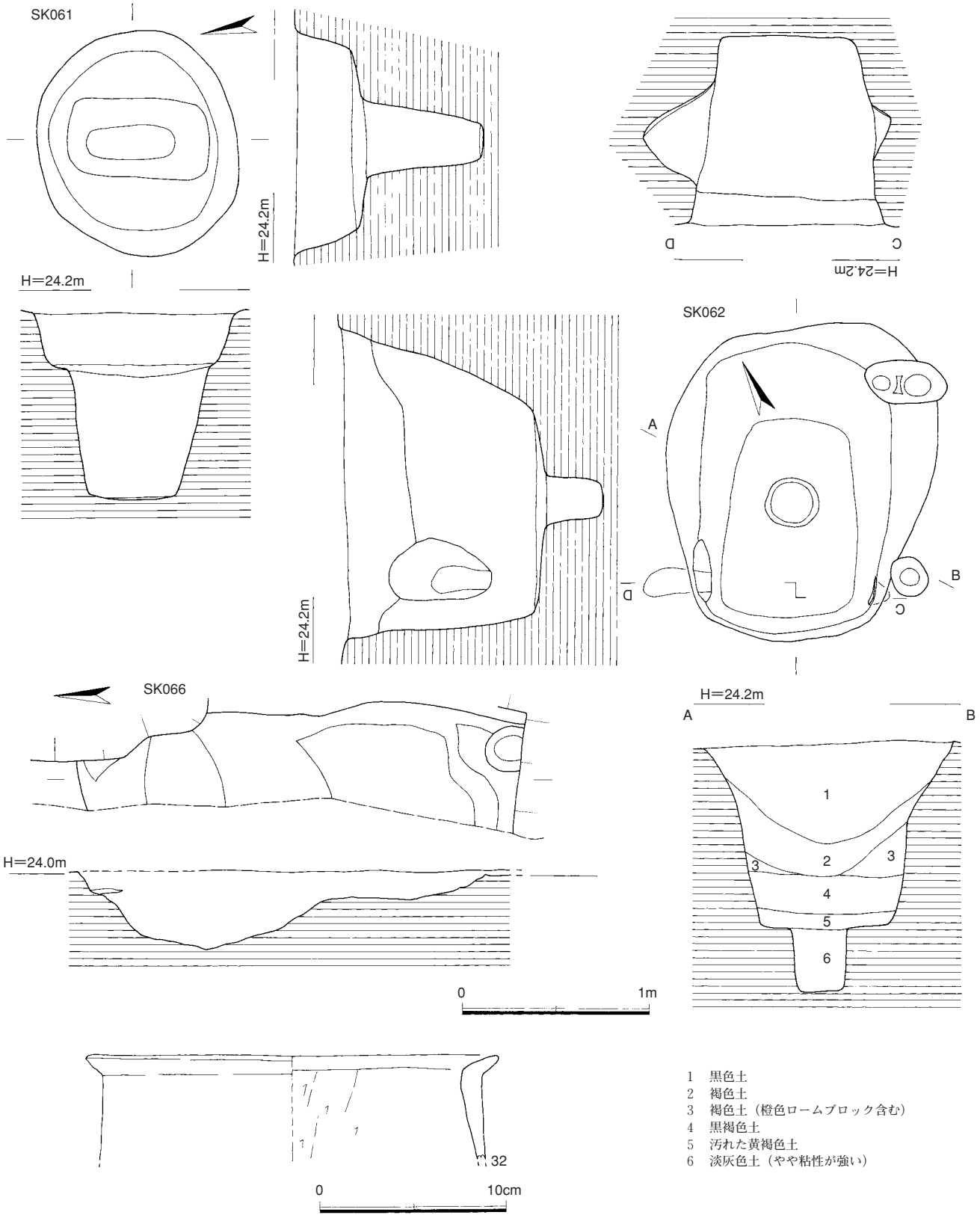
SD063・064（第30図）

調査区南端で検出する。中程に撹乱を挟んでいるが本来一連の溝状遺構と考えられる。南壁沿いにほぼ直線的に延びる溝であり、東端で僅かに曲がるようであるが、SR027との切り合いもあり不明瞭である。断面は明瞭な段が無く緩やかに傾斜し、現状で深さ20～30cmを測る。各土坑墓との切り合いは不明なものもあるが、SR035は溝埋土に切られている（第26図SR035土層図参照）。土器は小破片のみであるが弥生時代中期後半～末に位置付けられる遺物が出土しており、甕棺墓形成に伴う区画溝の可能性も考えられる。

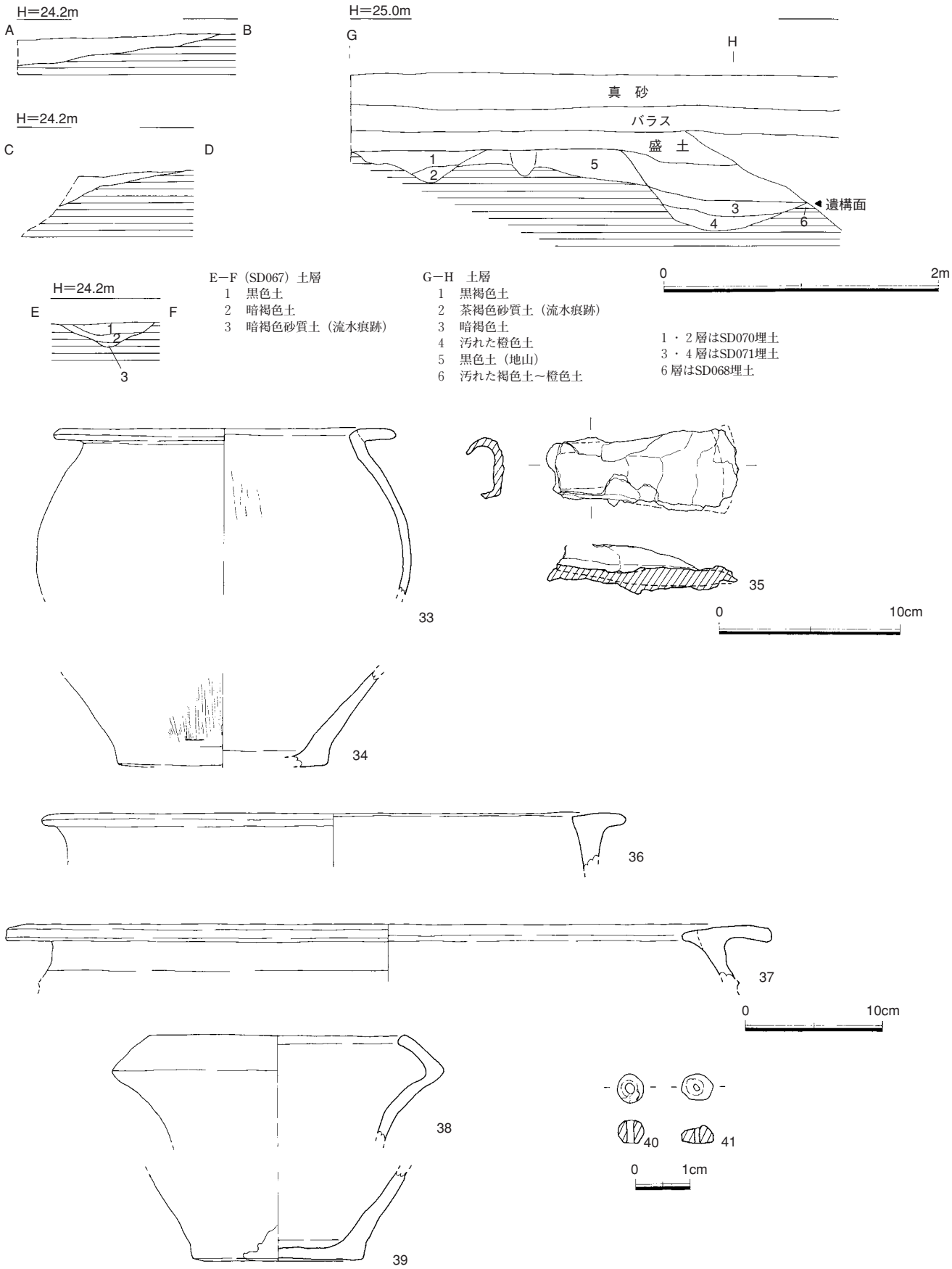
出土遺物（第30図　33～35）　33は無頸壺である。口縁部は水平で、内外面ナデによる。34は平底の底部破片である。外面には縦刷毛、内面はナデを行う。35は袋状鉄斧である。錆化が進み袋部も破損しているが、現状で長さ10.5cm程を測り、メタルは残存している。

SD067・070（第30図）

調査区中央部を東西方向に並列する溝である。いずれも丘陵の傾斜方向に向かって延びており、東



第29図　SK061・062・066及びSK061出土遺物実測図（１／30、１／３）



第30図　SD063・064・067・068・070及び出土遺物実測図
（1／40、40、41は1／1、33～36、38・39は1／3、37は1／4）

側が幅も広がっている。また共に最下位に流水によると考えられる埋土が堆積しており、この部分が幅20～30cmの狭い溝状となっている。SD070には明瞭な切り合い関係はないが、SD067は土坑墓・木棺墓に切られている。以上のことからこれらは埋葬遺構形成以前の自然流路と考えられる。

出土遺物（第30図　36）　36はSD067出土の甕である。口縁部は逆L字状を呈するが、外方への延びが少ない。弥生時代中期中頃の甕であろう。

SD068（第30図）

調査区北側低位部分に広がり、深さ10cm程の自然のくぼ地にしまりのない茶褐色土が堆積している。甕棺・丹塗り土器等の破片が出土している。新しい遺物は出土していないが、堆積土からは極新しいものとも考えられる。形成時期は不明である。

出土遺物（第30図　37～41）　37は甕棺破片である。口縁部上面は僅かに内傾している。38は複合口縁壺である。屈曲部はやや丸みを帯びている。39は平底の底部である。痕跡的に丹塗りが認められる。40・41はコバルトブルーを呈するガラス小玉である。

５）小結

今回の調査では弥生時代の甕棺墓19基、土坑墓17基、石蓋土坑墓２基、石棺墓２基の計40基を確認している。なお土坑墓としたものの大半は足元掘り込みを有し、横口式のもの（SR016・021）もみとめられる。また墓坑が残っているものには木蓋に伴うと考えられる粘土が残っている。埋葬遺構は調査地点のほぼ南側半分約150㎡の範囲で確認したものであり、調査区北側の丘陵斜面部分には墓域は広がらないようである。遺構の変遷をたどると、今回の調査地点では中期中頃の新段階に位置付けられるK017が最も先行するものである。次いで中期後半（K002・003・012）、中期末（K001・005・008・013・014・018・022）、中期末～後期初頭（K006・009）の変遷をたどるが、この間土坑墓・石棺墓は構築されていないようである。甕棺墓は後期前半（K007・010・020）まで営まれているが、この時期のK020はSR028に後出している。また石棺墓SR011は土坑墓SR021を切っている。以上のことから中期中頃～中期末の甕棺墓群が形成された後、後期前半には土坑墓が主体となるようであるが、甕棺墓も終焉に向かいながら依然構築されている。また土坑墓構築よりやや遅れて石棺墓が認められるようである。調査範囲が狭く遺構配置に明確な規則性は見られないが、おおよその傾向として丘陵西側から東側に墓域が移動しているようである。中央の南北に延びる尾根線から派生した東西尾根上に形成されたものであろう。副葬品は後期の甕棺墓（K010）、木棺墓（SR023・025・028）・石棺墓（SR037）・石蓋土坑墓（SR039）から水銀朱が認められるほかはSR028被覆粘土から出土した小玉のみである。

調査の項でも述べたように、本丘陵上では以前から埋葬遺構の存在は知られていたものの、本格的な発掘調査を経たものでなく不明瞭な点も多い。第１次調査によれば、本調査地点の北西側で、丘陵尾根線上において箱式石棺墓、石蓋土坑墓が53基、甕棺墓１基が確認されており、内行花文鏡・鉄器・玉類等の副葬品が出土している。ここでは甕棺墓がほとんど認められず、弥生時代後期を主体とした埋葬遺構群と考えられる。この時点では本調査地点周辺は中期の甕棺墓群として、異なる時期の遺構群として認識されていたが、今回の調査により開始時期は異なる可能性を有するものの、形成途上では同時期となる墓域として捉える事ができた。また本来この丘陵高位面上は南北に延びる尾根線を中心に樹状に尾根線が開析されていたものと考えられ、これらの尾根線上に更に多くの埋葬遺構群が形成されていた可能性も考えられる。今回の調査でその一部が明らかとなったが、今後周辺の遺跡群との関連も重要な課題となるであろう。

付編

弥永原遺跡第６次調査で検出された赤色顔料の調査

福岡市埋蔵文化財センター　比　佐　陽一郎

人類の歴史において赤という色は墳墓や祭祀の場など、いわゆる「ハレ」の場面において用いられてきた。古代日本において、その発色の源となる赤色顔料には、先学の研究により、酸化第二鉄（Fe_2O_3）を主成分とするベンガラ、硫化水銀（HgS）を主成分とする朱の存在が明らかにされてきた。この他にも赤色顔料としては四三酸化鉛（Pb_3O_4）による鉛丹もあるが、出土品の分析により確認された例は知られていない。これらは古の精神世界を探る手掛かりのみならず、顔料の種類や素材の産出地などの調査により、当時の社会、政治、物流など文化全般について情報を与え得る興味深い資料である。

今回は弥永原遺跡第６次調査で検出された赤色顔料について、含有元素の分析により、その種類を同定することを目的とした調査を行った。対象となった試料は、いずれも弥生時代中期後半～後期と考えられる甕棺墓や土壙墓、石棺墓などの埋葬遺構６カ所より検出された15点（サンプル）で、一つの遺構でも複数箇所から採取されたものもある。いずれも各遺構内で部分的に小規模な集中部分が散在した状態で検出されており、土ごと採取されている。量が僅かなこともあり、顔料の法量を重量などで数値化することは困難な状況である。各試料の出土遺構と採取場所については一覧表に示すとおりである。

肉眼観察では、各試料とも量の多少や色調における多少の濃淡、あるいは明暗はあるものの、いずれのサンプルも明瞭な赤色の発色が見られ、これらが顔料として葬送儀礼に際し人為的に使用されたと見て問題ないものと思われる。また実体顕微鏡を用いた６～40倍程度の拡大観察では、落射光の照明下で顔料の粒子が光を反射してギラギラと輝き、鮮やかな赤色を呈している。この倍率で見る限り、各試料内では異なる粒子の混じり合いは見られず、いずれも同一の粒子であることが伺える。過去の類例調査の経験からは、これらが朱の粒子であることが予測された。

次に蛍光Ｘ線分析法による含有元素の分析を行った。この方法は試料にＸ線を照射し、含有する各元素から発生する二次Ｘ線（特性Ｘ線）を検出器でとらえてＸ線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。赤色顔料の調査では各種類の顔料に於いてベンガラであれば鉄（Fe）、朱であれば（Hg）、（鉛丹では鉛〔Pb〕）といった特徴的な金属元素が含有されており、これらの有無によりその種類を判別することになる。ただし鉄は土壌中にも豊富に含まれる元素であり、分析による鉄の検出のみをもってベンガラの存在を結論づけることは危険である。

装置は土中の顔料範囲が数 mm 大であることから、Ｘ線の照射領域を絞った微小領域用エネルギー分散型のもの（エダックス社製／Eagle μ probe）を用いることとした。また作業は取り上げた土そのままでは、都合良く赤色部分が測定範囲に収まらないものもあるため、取り上げ試料の中から特に赤色顔料部分のみを少量抽出し、これを発泡スチロール板にカーボン製両面テープを貼り付けたものに固定して行った。カーボン（炭素：C）は蛍光Ｘ線分析では検出されない元素であるが、念のため作業にあたっては、事前に試料を置かない状態でカーボンテープ上の分析を行い、顔料に関係する元素が検出されないことを確認している。装置の作動条件は以下の通りである。

対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧・電流：40kV・電流値任意／測定

雰囲気：真空／測定範囲0.3mm φ／測定時間300秒

分析の結果は、全点ほぼ同じようなものとなっており、いずれの試料からも明瞭な水銀のピークが検出されている。顕微鏡観察の結果とも併せ、これらの赤色顔料は朱であると考えられる。鉄もやはり全資料から検出されているが、その強度は水銀に比べると弱く、分析試料の抽出にあたっては土壌も採取され、珪素やアルミニウムなど土壌由来元素が認められることや、事前の顕微鏡観察で異なる顔料粒子の混入が特に認められなかったことと併せて、この鉄は土壌成分に含まれるもので、ベンガラに因るものではないと判断される。

	遺構No.	資料枝番	遺構種別	試料採取位置	時　期	顕微鏡観察	蛍光X線分析	備　　考
1	010		甕棺墓	下甕底部付近	弥生後期前半	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
2	023	No.1	土壙墓	主体部西側(推定頭胸部)任意	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
3	023	No.2	土壙墓	主体部西側(推定頭胸部)任意	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
4	023	No.3	土壙墓	主体部西側(推定頭胸部)任意	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
5	025	No.1	土壙墓	主体部東側(推定頭胸部)任意	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
6	025	No.2	土壙墓	主体部東側(推定頭胸部)任意	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
7	028	No.1	土壙墓	主体部南側（推定頭部）	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
8	028	No.2	土壙墓	No.1北隣（推定胸部）	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
9	028	No.3	土壙墓	主体部西側	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
10	037	No.無し	石棺墓	主体部内任意	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
11	037	No.1	石棺墓	主体部東側（推定頭胸部）	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
12	037	No.2	石棺墓	主体部中央	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
13	037	No.3	石棺墓	主体部南西部分	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
14	037	No.4	石棺墓	主体部南側中央	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる
15	039		石蓋土壙墓	主体部中央	弥生後期	朱	Hg(・Fe ※)	Fe(鉄)は土壌由来と考えられる

分析資料とその結果

赤色顔料「朱」は、硫化水銀の結晶である辰砂と呼ばれる鉱石を磨り潰して微粒子にしたもので、その使用起源は日本では縄文時代後期初頭にまで遡る（成瀬2002）。長年にわたり赤色顔料の研究を進めてこられた本田光子氏によれば、北部九州の弥生墳墓でも、その当初から朱の使用が認められ（本田1988a）、甕棺墓の盛行に伴って朱の使用も活発化するようである。弥生時代後期前半以降、甕棺墓の衰退に伴い、埋葬主体が土壙墓や石棺墓に移行すると、赤色顔料の使用も朱中心であったもの（本田氏の分類によるａ類）が、埋葬主体にはベンガラを、遺骸には朱を用いるという、朱とベンガラを併用しつつ使い分ける状況（同ｂ類）や、埋葬主体へのベンガラの単独使用（同ｃ類）に変化することが指摘されている（本田1997）。本遺跡の場合、使用されていた顔料は全て朱であり、ａ類の典型と言える。また、その使用状況は甕棺墓と石蓋土壙墓を除く土壙墓では、主体部内において長軸方向の片側どちらかに偏在しており、主体部の幅や過去の調査事例などから頭胸部を中心に用いられたものと考えられる。

周辺地域では過去に、福岡市南区井尻Ｂ遺跡や春日市立石遺跡などで弥生～古墳前期の墳墓に用いられた顔料の調査が行われている。井尻Ｂ遺跡では土壙墓や石蓋土壙墓11基の顔料が調査され、朱とベンガラの併用（ｂ類）やベンガラの単独使用（ｃ類）が報告されている（本田1988b）。これらは土器の出土が無く時期決定の手掛かりが乏しいが、周辺の状況から古墳時代初頭～前期の範疇で捉えられている（吉留他1988）。また立石遺跡では甕棺墓、石蓋土壙墓各１基と、土壙墓７基などの顔料が調査されているが、これらは全て朱の単独使用（ａ類）とされている（本田2002）。こちらも甕棺墓が弥生中期前半に比定される以外は時期決定根拠に欠けるが、遺構の検出状況や出土遺物を手掛かりに、弥生後期～古墳前期と考えられている（境2002）。この様に若干時期に幅はあるものの、同一

地域内でも顔料の使用状況が遺跡によって異なっており、被葬者や祭祀の系譜などが注目される。

また本田氏によれば弥生時代の中で、粒子の大きさが変化することも指摘されており、その背景には辰砂から朱への調整方法、つまり朱の製造方法や、原料の入手経路が変化した可能性を想定されている（本田1988a）。今回は粒度の調査にまでは至っていないが、顔料の動きを知る上では重要な情報となるものであり、今後の課題である[註)]。

顔料研究は現在、文化財科学の分野で新たな展開を見せようとしている。本田光子氏らは、使用状況の精査により、これまで考えていたよりも複雑な使い分けのあったことを明らかにしたり、埋葬状況の復元に重要な情報を提供するなど（志賀他2003）、顔料の背景に存在する人の動きを復元する研究を進めている。また朱については、含まれる硫黄の同位対比から列島産と大陸産の区別をつける分析も試みられている（南他2002・2003）。かつて本田氏が「土と共に闇に葬り去られる顔料に日の目を見させる」（本田1988a）として行った研究は、現在では考古学に不可欠なテーマとして輝いている。今回行った調査は最先端には及ばない極基礎的な内容ではあるが、その一助にでもなれば幸いである。

註）

この時期における朱の原産地を考える場合、辰砂は国内では奈良、三重県、徳島県などの中央構造線沿いや北海道などが知られているが、それ以外に中国大陸も視野に入れる必要があると思われる。特に北部九州では福岡市の比恵遺跡、南八幡遺跡、前原市の三雲遺跡などで辰砂鉱石が発見されているが（比佐他2001）、それらはいずれも数 mm ～ 1 cm を超える塊状の結晶で、北海道を除く国内産の結晶が母岩上に薄く広がる様相と異なり、中国の貴州省などで見られるものに外観が酷似している。この様に産地以外で辰砂の発見される遺跡が、現在のところ古代中国の歴史書に登場するクニの比定地であり、その結晶が日本より中国のものに類似することは非常に示唆的である。本遺跡も奴国に該当する地域であることからすれば、その朱に中国産の辰砂が用いられている可能性も決して低くないであろう。

参考文献

境　靖紀（編）2002『立石遺跡』春日市文化財調査報告書第34集　春日市教育委員会

志賀智史・本田光子2003「葉佐池古墳出土の赤色顔料とその関連遺物」『葉佐池古墳』松山市文化財調査報告書92　松山市教育委員会

成瀬正和2002「顔料」『文化財のための保存科学入門』角川書店

比佐陽一郎・片多雅樹　2001「比恵遺跡69次調査で出土した赤色物質の保存科学的調査」『比恵30－比恵遺跡群第69次・70・71次発掘調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第671集　福岡市教育委員会

本田光子1988a「弥生時代の墳墓出土赤色顔料－北部九州地方に見られる使用と変遷－」『九州考古学』第62号　九州考古学会

本田光子1988b「井尻Ｂ遺跡出土の赤色顔料について」『井尻Ｂ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集　福岡市教育委員会

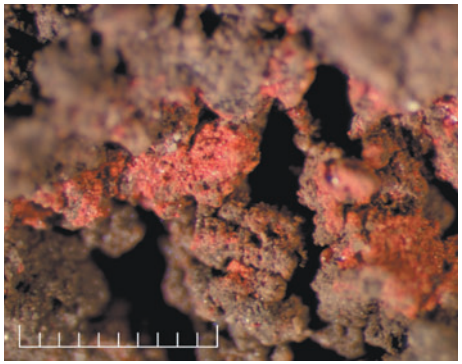
本田光子1997「カルメル修道院内遺跡第５次調査出土赤色顔料について」『カルメル修道院内遺跡４－カルメル修道院内遺跡第５次調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第504集　福岡市教育委員会

本田光子2002「春日市立石遺跡出土赤色顔料について」『立石遺跡』春日市文化財調査報告書第34集　春日市教育委員会

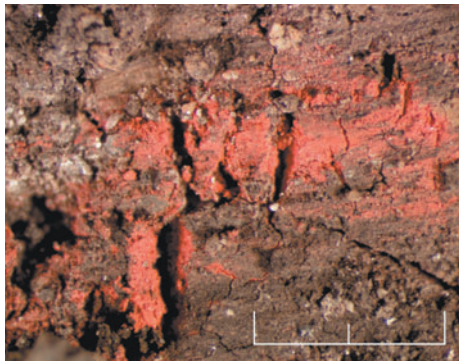
南　武志・今津節生・今井　亮・高橋和也・豊　遙秋・本田光子2002「イオウ同位対比より見た朱の産地推定」『日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

南　武志・今井　亮・今津節生2003「イオウ同位対比より見た遺跡出土朱の産地推定」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

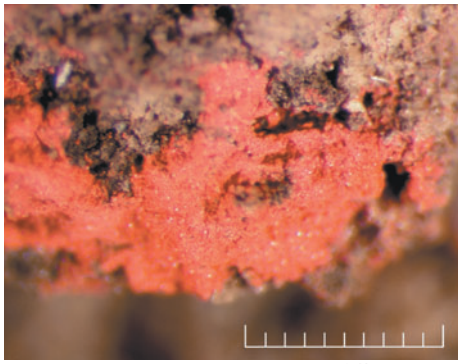
吉留秀敏・山口譲治・城戸康利（編）1988『井尻Ｂ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第175集　福岡市教育委員会



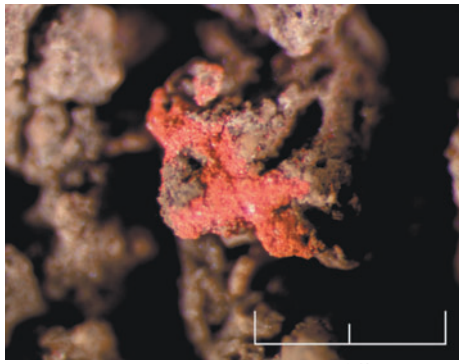
甕棺墓 010



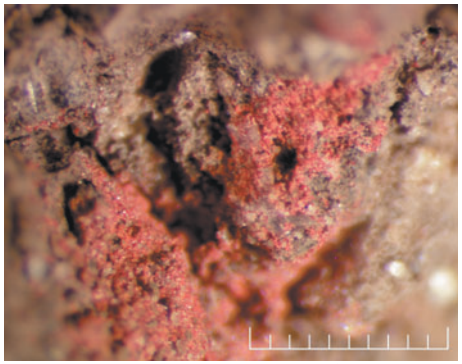
土壙墓 023-No.1



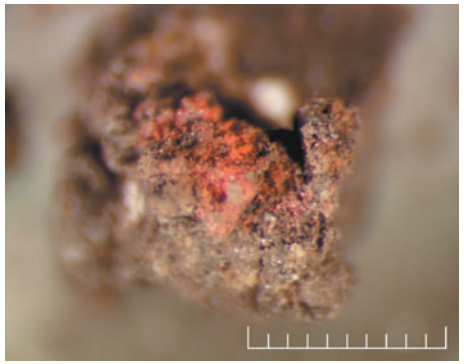
土壙墓 025-No.1



土壙墓 028-No.2

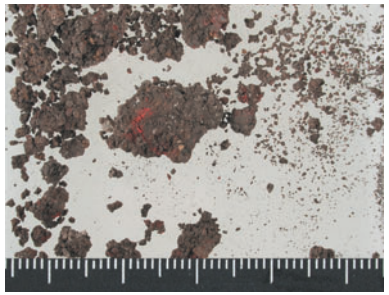


石棺墓 037-No.3

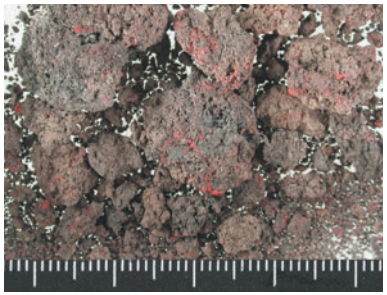


石蓋土壙墓 039

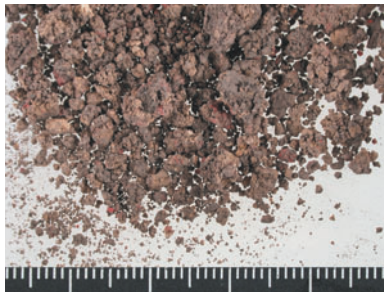
実体顕微鏡写真



土壙墓 023-No.1



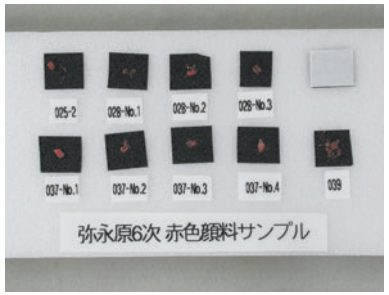
土壙墓 025-No.1



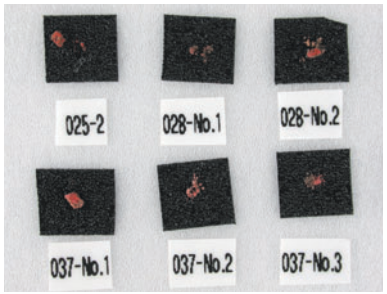
土壙墓 028-No.2

石棺墓 037-No. 無し

試料の外観



全体



部分

分析試料の設置状況

写真１　福岡女学院及び周辺（1965年撮影）（南西から）

写真２　福岡女学院及び周辺（1970年撮影）（北東から）

写真３　福岡女学院及び周辺（1991年撮影）（北東から）

写真４　福岡女学院及び周辺（1992年撮影）（南東から）

写真５　調査区南半全景（北から）

写真６　調査区南半全景（北から）

写真７　調査区北東部全景（北から）

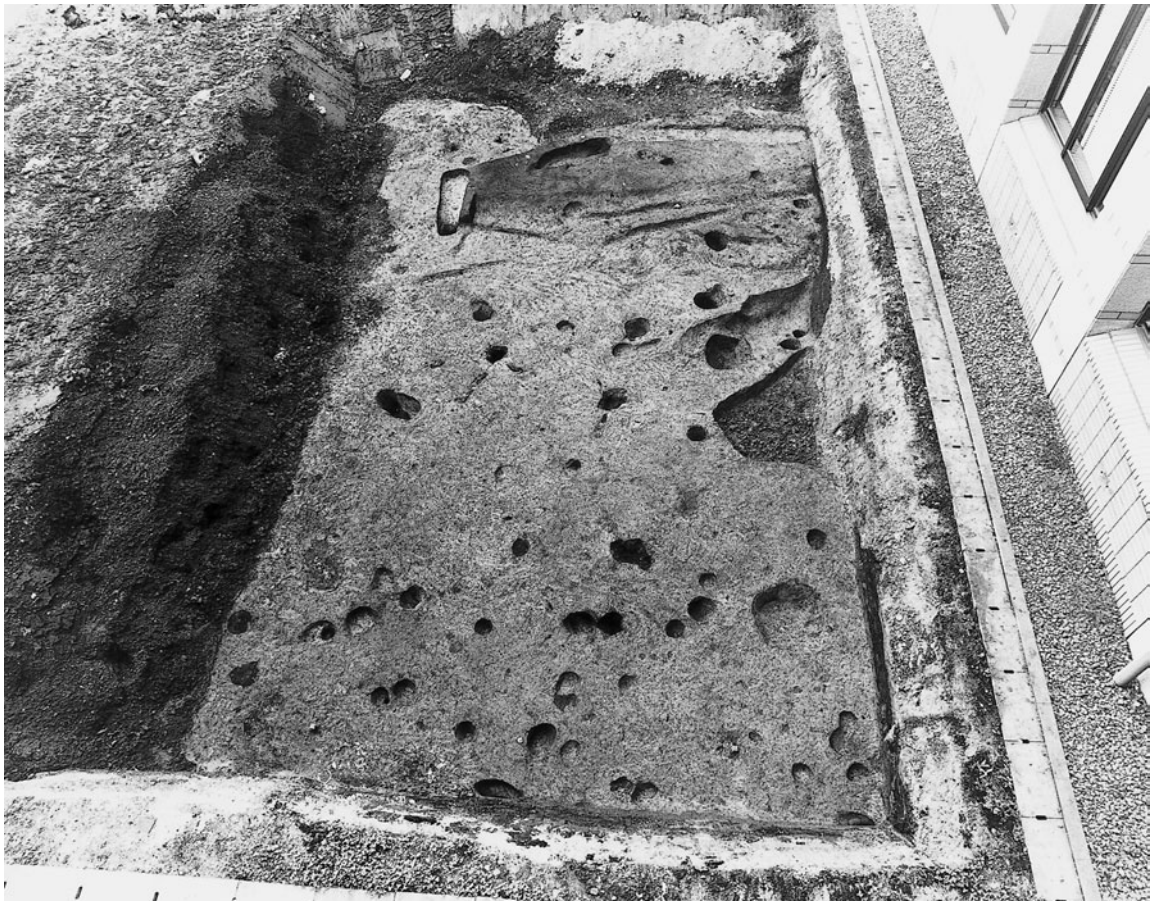


写真８　調査区北西部全景（北から）

写真９　調査区北東部南側（北から）

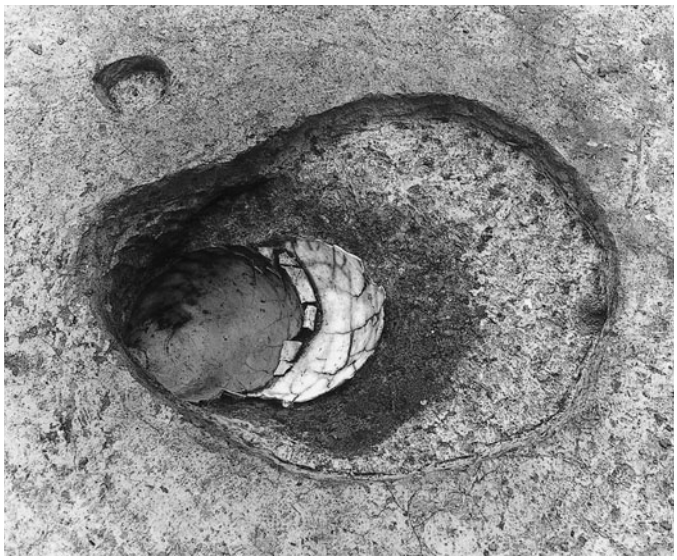


写真10　K001（西から）

写真11　K002・003（東から）

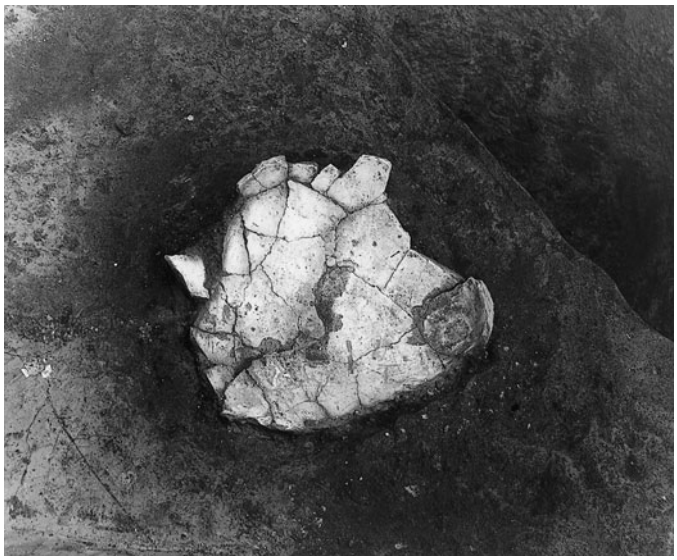


写真12　K004（南から）

写真13　K005（東から）

写真14　K006（南から）

写真15　K007（南から）

写真16　K008（北から）

写真17　K009（西から）

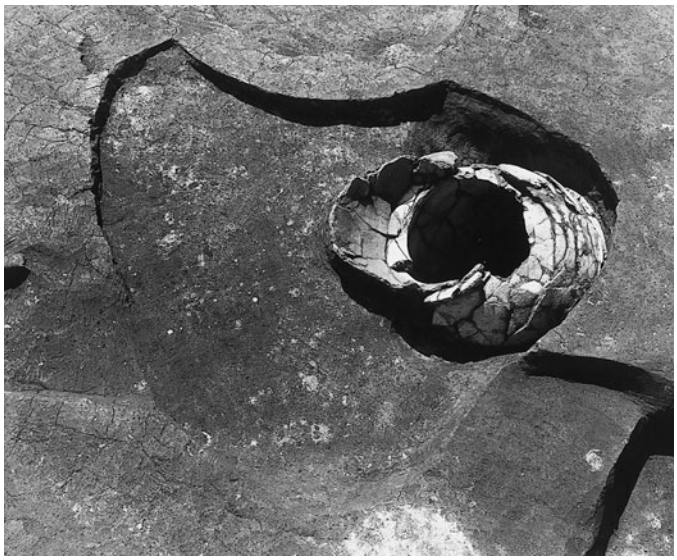


写真18　K010（北から）

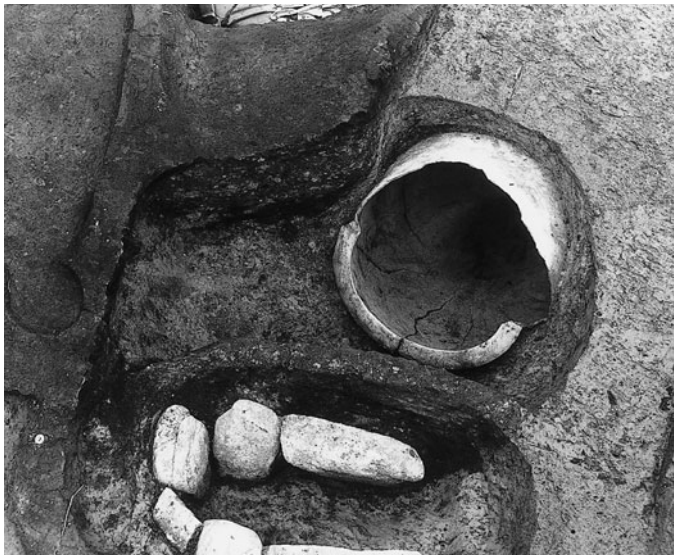


写真19　K012（南から）

写真20　K013（北から）

写真21　K014（西から）

写真22　K015（南から）

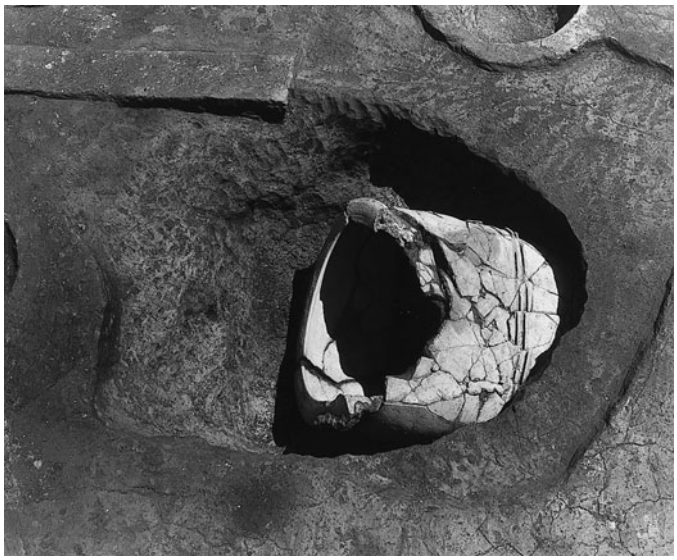


写真23　K017（西から）

写真24　K018（西から）

写真25　K019（西から）

写真26　K020（南から）

写真27　K022（北から）

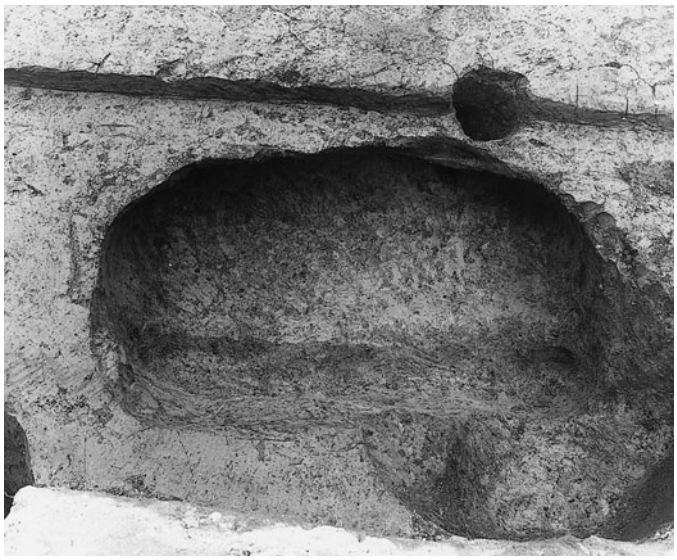


写真28　SR016（西から）

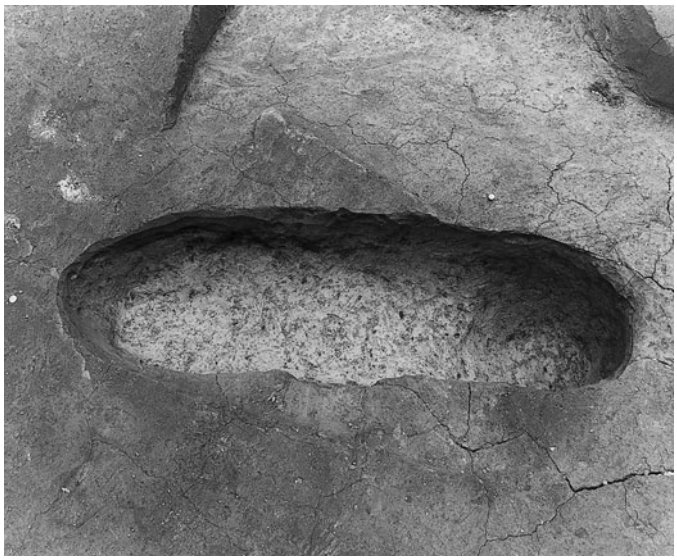


写真29　SR029（北から）

写真30　SR021（南から）

写真31　SR023（東から）

写真32　SR023土層

写真33　SR024（北東から）

写真34　SR025（東から）

写真35　SR026（西から）

写真36　SR027（南から）

写真37　SR028（南から）

写真38　SR030（南東から）

写真39　SR033（東から）

写真40　SR035（東から）

写真41　SR036（東から）

写真42　SR036土層

写真43　SR040（南東から）

写真44　SR011（東から）

写真45　SR011（南から）

写真46　SR011（南東から）

写真47　SR038（西から）

写真48　SR038石蓋除去後（西から）

写真49　SR039（北から）

写真50　SR039石蓋除去後（北から）

写真51　SR037（北西から）

写真52　SR037（西から）

写真53　SK061（南から）

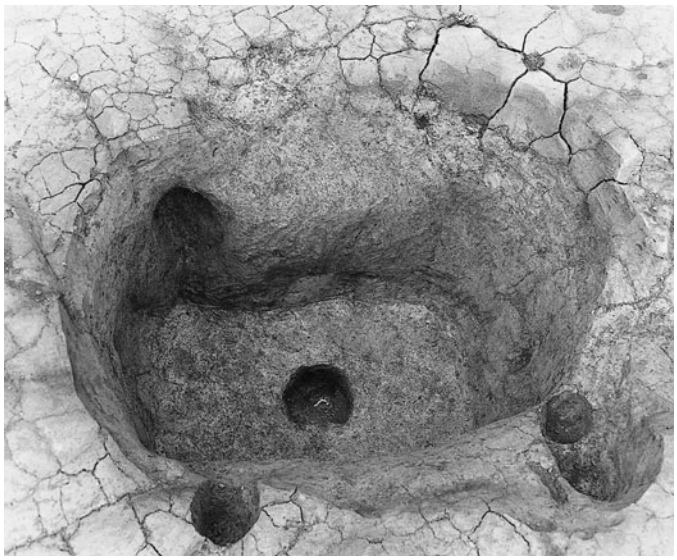


写真54　SK062（南東から）

写真55　SK062土層

写真56　SD067・070東壁土層

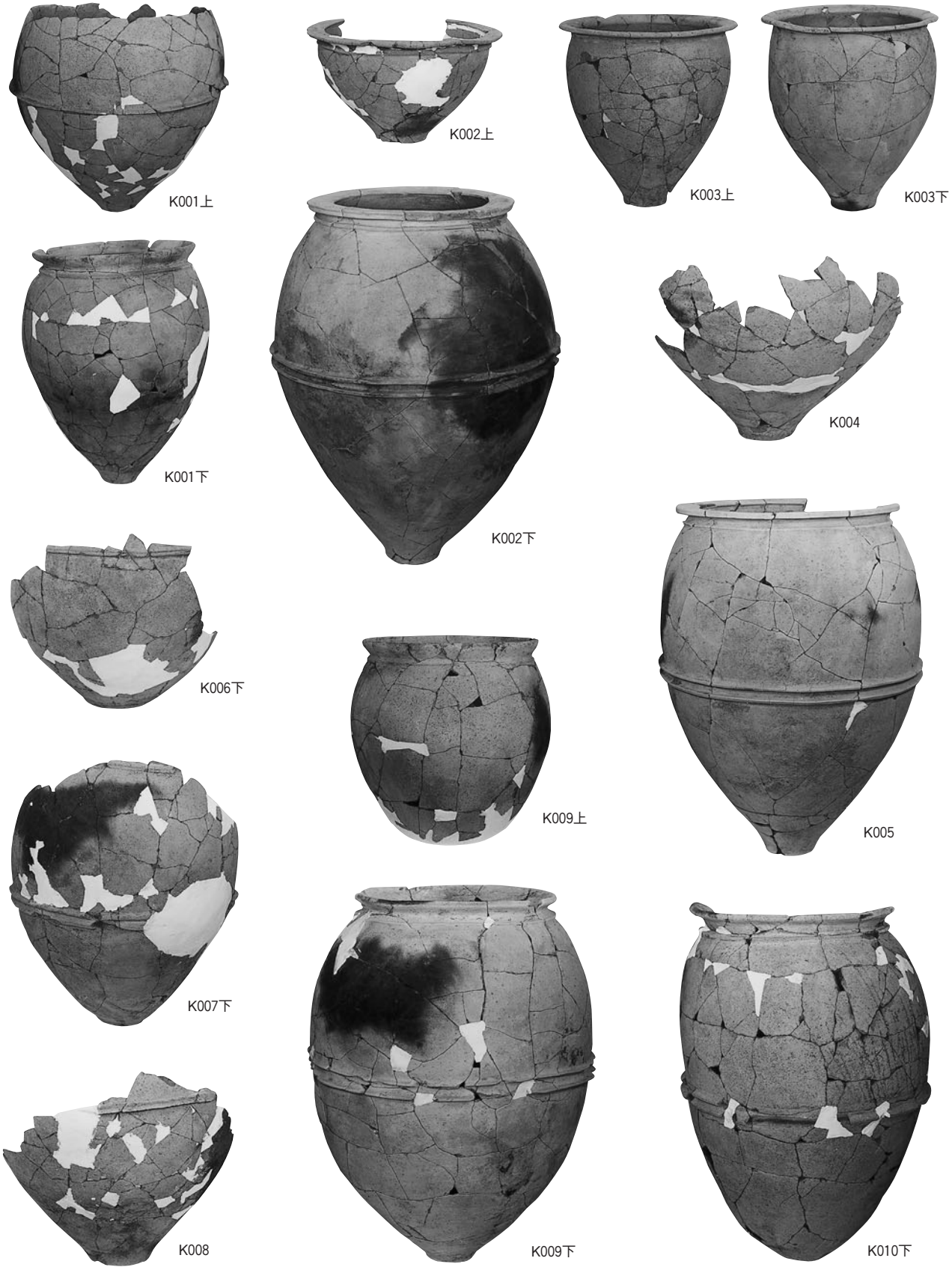
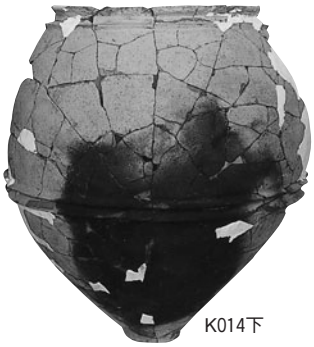
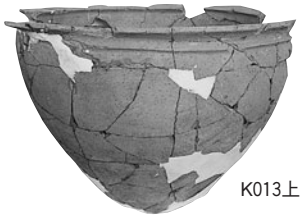

K001上
K002上
K003上
K003下
K001下
K002下
K004
K006下
K009上
K005
K007下
K008
K009下
K010下

写真57　出土遺物１

K012


K014下

K017


K013上

K018

K020

K013下

K022上

K022下

写真58　出土遺物 2

書名ふりがな　やながばるいせきご
書　名　弥永原遺跡５
副書名　－第６次調査報告－
巻　次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　830
編著者名　長家　伸
編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　20040331
作成法人ID
郵便番号　810－8621　電話番号　092－711－4667
住所　福岡市中央区天神１－８－１
遺跡名ふりがな　やながばるいせき
遺跡名　弥永原遺跡
所在地ふりがな　ふくおかしみなみくおさ３ちょうめ42の１
遺跡所在地　福岡市南区日佐３丁目42－１
市町村コード　40134
北　緯　33°31′58″
東　経　130°26′33″（世界測地系）
調査期間　20020401～20020517
調査面積　265m²
調査原因　学校内図書館増設
種　別　墳墓
主な時代　弥生
遺跡概要　弥生－甕棺墓19＋土坑墓17＋石蓋土坑墓２＋石棺墓２、他土坑・溝・ピット等
特記事項

弥永原遺跡５

－第６次調査報告－

2004年（平成16年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　㈱富士印刷社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目６－45